

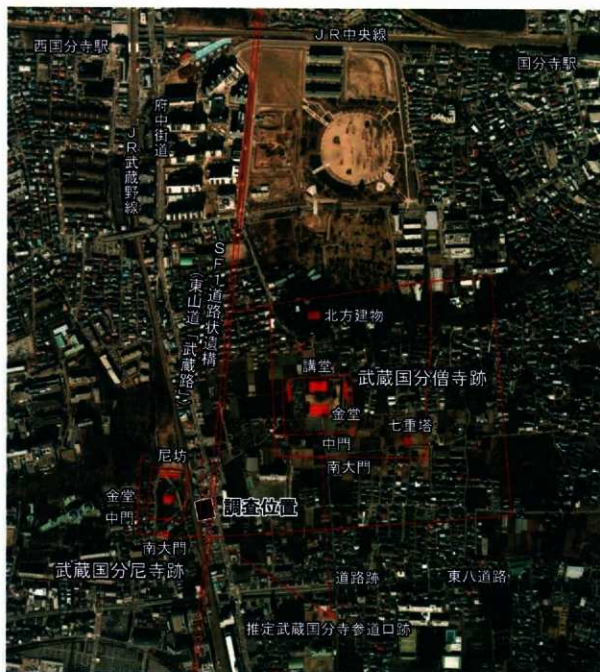
武蔵国分寺跡発掘調査概報

27

—僧尼寺中間地点・(株)日東建設所有地に伴う調査—

2003年3月

国分寺市遺跡調査会

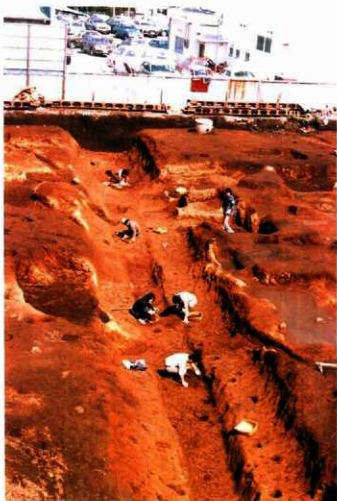


武蔵国分僧尼寺跡航空写真





1. 調査区遠景（市立第四中学校屋上より）（東から）



2. 発掘風景スナップ



1. SD70溝跡 B期平面全景 (北から)



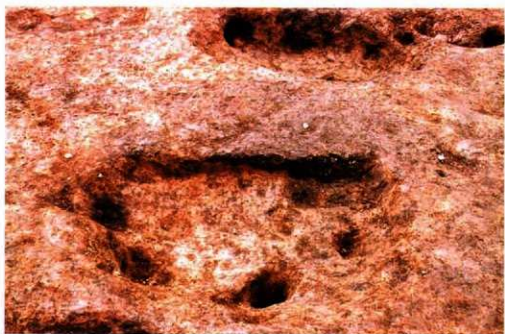
2. SD70溝跡 南壁土層断面 (北から)



1. SD71溝跡 平面全景 (北から)



2. SD71溝跡 B-B' 土層断面 (南から)



3. SD71溝跡 硬質面下 Pit34断面 (北から)



1. SD76溝跡 土層断面 その1 (南から)



2. SD76溝跡 土層断面 その2 (南から)



3. SD83溝跡 土層断面 (南から)



1. SD70溝跡 A期 出土土器



2. SD70溝跡 B期 出土土器



3. S1194住居跡出土 灰釉陶器

序

科学の世界にあっては、時の流れによって研究の深化・新資料の検出・認識度の変容などにより定説が覆ることが珍しくないが、このような事態は、学問の進歩発展にとって喜ばしい動きである。物質的資料を研究の対象としている考古学にあって、かかる次第は日常的によく指摘されていることであるが、調査の対象を等しくしている埋蔵文化財の分野においても、このような事例が認められる場合がある。

昭和53年6月から翌年の4月にかけて、国分寺市西元町3丁目において実施された埋蔵文化財の調査結果をめぐって、関係者間で論議された溝とそれに接して検出された硬い層の理解についての問題も、時の流れによる研究の進展と類似資料の新知見によって解決された一例である。

調査の対象とされた地は、武蔵国分僧寺跡と尼寺跡に挟まれた空間に位置していたことから、尼寺の東の限界を知ることでできる地域であると考えられてきた。調査の結果、果せるかな総じて南北方向に主軸をもつ東西二条の溝状遺構の存在が、狭長な不規模土坑の連続存在によって推察されるにいたった。東西の心々は12mを測り、その中に幅員4m前後の硬質面が形成されていた。まさに、道路状遺構が検出されたのである。しかし、あたえられた範囲では、南と北、それぞれの方向にどの程度にわたって、この遺構が連続しているのか定めることができなかった。

かかる道路状の遺構－溝と硬質面－については、より南方の府中市においても部分的に検出されていたこともあって、国分寺市域と府中市域における幅12mの遺構が注目されるようになっていった。そして、この遺構こそ、東山道「武蔵路」であることが想定されるようになった。

検出された道路の主軸は、南北に走行を有し、あたかも尼寺の主軸と軌を一にするかのごとき状態をもっている。それは僧寺の主軸とは明らかに異なり、既存の東山道「武蔵路」を意識して尼寺が造営されたかの趣を示し、あわせ検出された掘立柱建物跡の性格ともどもきわめて注目される。

東山道「武蔵路」の存在とその実態については、その後の調査研究によって、かなり明瞭になってきた。その嚆矢を飾る資料としてここに報告書が刊行されることになった。

事前調査に協力を願った(株)日東建設と調査に尽力された関係者各位に感謝の意を表する次第である。

平成15年3月31日

国分寺市遺跡調査会会長

坂 詰 秀 一

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町3丁目1.380に所在する、(株)日東建設の宅造に伴う調査の成果をまとめたものである。調査に係る費用は(株)日東建設が負担した。
2. 調査は昭和53年6月1日から昭和54年4月15日まで行った。報告書作成作業は発掘調査終了後速やかに着手し、体裁を整えて清算行為を行った。しかしながら、国分寺市内及び周辺地域における道路状遺構の調査・研究は著しく、発掘調査段階では認識されなかったSF1道路状遺構(通称「東山道武蔵路」)に関する情報が急激に増加した。その結果、当初の報告書記載内容では単に連続する直線の溝状遺構及び性格不明の硬質面として記述されていた遺構が、実はその後の周辺地区の調査でSF1道路状遺構の東西制溝とその道路面であることが判明するなど、道路状遺構認識の根幹に係る明らかな齟齬が発生した。そのため、本報告書はそれらの齟齬を修正し、近年の調査成果を盛り込んで正式な報告書として平成15年3月31日の刊行とした。なお、本調査は武蔵国分寺遺跡調査会の第68次調査として実施したものである。
3. 発掘調査は、渡辺克彦が現場を担当した。
4. 本書の執筆・編集は滝口宏(平成4年3月31日退任)・吉田格・永峯光一(平成14年7月8日退任)・大川清・坂詰秀一の監修のもとに、渡辺克彦・有吉重敏・上敷領久の各調査員が分担した。
5. 出土遺物の整理、版下作成作業は主に小林幸江・草野夏美・田中浩身・山口啓子・大羽正子・大下ゆみがあたった。
6. 報告書作成の過程で次の方々に御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。(順不同、敬称略)
早川泉・中山真治・荒井建治・塚原二郎・江口桂
7. 発掘調査ならびに整理作業に参加、協力いただいた方は下記のとおりである。記して感謝の意を表したい。(アイウエオ順、敬称略)

発掘作業

相原栄男・熱海重行・天野方彦・荒畑信樹・石垣涉・石田光一・石田秀政・石塚俊之・石場繁・市川勉・市川清・伊藤繁男・入江涉二・梅田高志・大久保敏昭・大野隆之・長神功・加賀爪幸一・川合雅秀・河内公夫・岸本章・気田敏三・木原正明・小堺俊一・小島居均・小林俊猛・小柳朗・斉藤智之・斉藤瑞樹・榊茂樹・佐藤雅美・鶴正美・清水隆博・庄司良則・関三男・高瀬寛治・高野良一・高橋雅之・田中謙・田中広・田村宏司・千葉稔・土橋秀一・中條寛・中山裕士・長埜孝行・中村晃・中村

亭・西紀俊・西野吉勝・似内紀美男・二村卓見・根本正進・長谷川蓮・早川良平・半田義人・平野
進・福士理・前園富士男・松崎伸一・松崎伸一郎・南川交伸・望月晃・本木和男・山内信弘・和田俊
雄

整理作業

青田由美子・天野芳彦・馬上久美子・梅沢節子・大沢華子・大下ゆみ・大羽正子・岡ミサオ・加賀爪
幸一・川岸満子・鎌田育美・河内公夫・北島由美子・北島博子・木村初江・草野夏美・桑名俊子・小
林幸江・小室厚美・斉藤さだ子・滝瀬とも子・田中造身・田中館尚子・千葉剛子・長岡サナエ・永澤
昭子・西山時江・林恭子・東清子・南川交伸・八高昭枝・山口啓子

凡 例

共通

1. 遺構は遺跡を通してほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。

縄文時代の遺構については末尾にJをつけた。また、本文中においては「SD70溝跡」

「SK371J土坑」のように記述した。

SB 掘立柱建物跡	SI 住居跡	SD 溝跡
SK 土坑	P 小穴	SK J 土坑（縄文）

2. 遺物の記述についてはすべて一覧表とした。

(1) 表中の計測値のうち、括弧の無いものは完数値、()は残存数値、()は復元数値、
一は計測不可を示す。また、単位は特に表記しないものはすべてcmである。

(2) 遺物の分類については「武蔵国分寺跡発掘調査概報XIV」に拠った。

図面・図版

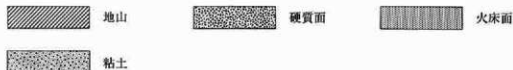
1. 遺構

(1) 遺構配置図表示の数字は発掘基準線中心点からの距離を表す。発掘基準中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上中心点南26.276mに後者がある。また、僧寺中軸線の方位は発掘基準線と一致し、真北から6° 34' 46"、磁北から0° 4' 46"それぞれ西偏する。

(2) 遺構配置図中、小穴については名称の表記を省略した。

(3) 断面図表示の数字は水系レベルで海拔高を示す。

(4) 遺構のスクリーントーンの指示は以下の通りである。

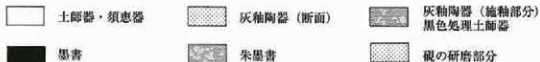


(5) 図面の縮尺は次の通りに統一したが、一部異なるものがある。

遺構配置図	1/250	掘立柱建物跡・住居跡・溝跡・土坑	1/50
住居カマド	1/25		

2. 遺物

(1) 遺物のスクリーントーンの指示は以下の通りである。



(2) 遺物図版中の番号は図面番号と対称にした。例えば、「11-2」とあれば「図面11-2」のことを指す。

(3) 遺物の縮尺は次の通りに統一したが、一部異なるものがある。

[図面]

歴史時代	土器類	1/3	石製品	1/2	金属製品	1/2
	瓦類	1/4	土製品	1/2		

[図版]

歴史時代	土器類	1/2・1/3	石製品	1/2	金属製品	1/1・1/2
	瓦類	1/4	土製品	1/1	文字資料	1/1

目 次

序	1
例 言	2
凡 例	4
I 調査に至る経緯	11
II 発掘経過	14
III 調査地区の概観	16
1. 調査地区の位置・立地	16
2. 層 序	17
IV 検出遺構	19
1. 歴史時代検出遺構	19
2. 縄文時代検出遺構	28
3. 分析化学からのアプローチ	28
V 出土遺物	36
VI 小 結	51
1. 尼寺伽藍地東辺区画溝の規模と変遷	51
2. SF1道路状遺構の形状	53
VII 総 括	57
参考文献	58
国分寺市遺跡調査会組織	59
報告書抄録	60

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置
第2図 調査地区の位置
第3図 国分寺市の地形模式図
第4図 地形面分布図
第5図 調査区基本土層図
第6図 溝埋没状況模式図 (写真は土壌サンプル用メッシュ)

- 第7図 A～GカラムのpH値
 第8図 pH値濃度分布図
 第9図 SD70溝跡内出土土器 模式図
 第10図 尼寺全体図
 第11図 市内SF1道路状遺構 調査地点の位置
 第12図 SD71溝跡 波板状遺構 配置模式図
 第13図 道路断面模式図 (A-A')

表 目 次

- 第1表 土壤サンプルpH値測定表 (上)・t 検定結果表 (下)
 第2表 出土遺物一覧表 (1)
 { }
 第15表 出土遺物一覧表 (14)

図 面 目 次

- 図面1 遺構配置図
 図面2 SD70溝跡 実測図
 図面3 SD71・74～76・78・85溝跡、SB52掘立柱建物跡 実測図
 図面4 SI172住居跡 実測図
 図面5 SI174住居跡 実測図
 図面6 SI186住居跡 実測図
 図面7 SI192・194住居跡 実測図
 図面8 SK311・312・367・370・372～375・392・393土坑 実測図
 図面9 SK368・394・371J・376J・377J土坑 実測図
 図面10 SD70溝跡 出土遺物 (1)
 図面11 SD70溝跡 出土遺物 (2)
 図面12 SD70溝跡 出土遺物 (3)
 図面13 SD70溝跡 出土遺物 (4)
 図面14 SD70溝跡 出土遺物 (5)
 図面15 SD70溝跡 出土遺物 (6)

- 図面16 SD71溝跡、SI172住居跡 出土遺物
 図面17 SI174・186住居跡 出土遺物
 図面18 SI192住居跡 出土遺物 (1)
 図面19 SI192住居跡 出土遺物 (2)
 図面20 SI192住居跡 出土遺物 (3)
 図面21 SI194住居跡、SK368・393土坑、遺構外 出土遺物

図 版 目 次

- 巻頭図版1 武蔵国分館尼寺跡航空写真
 巻頭図版2 1. 調査区遠景 (市立第四中学校屋上より) (東から)
 2. 発掘風景スナップ
 巻頭図版3 1. SD70溝跡 B期平面全景 (北から)
 2. SD70溝跡 南壁土層断面 (北から)
 巻頭図版4 1. SD71溝跡 平面全景 (北から)
 2. SD71溝跡 B-B' 土層断面 (南から)
 3. SD71溝跡 硬質面下 Pit34断面 (北から)
 巻頭図版5 1. SD76溝跡 土層断面 その1 (南から)
 2. SD76溝跡 土層断面 その2 (南から)
 3. SD83溝跡 土層断面 (南から)
 巻頭図版6 1. SD70溝跡 A期 出土土器
 2. SD70溝跡 B期 出土土器
 3. SI194住居跡出土 灰軸陶器
- 図版 1 調査地区 (1) 1. 遠景 (北東から)
 2. A地区南半部西側全景 (北から)
 図版 2 調査地区 (2) 1. A地区南半部東側全景 (北から)
 2. B地区北半部東側全景 (南から)
 図版 3 調査地区 (3) 1. B地区北半部西側全景 (東から)
 2. C地区北半部東側全景 (北から)
 図版 4 SD70溝跡 (1) 1. A期溝跡全景 (北から)
 2. B期溝跡全景 (北から)
 図版 5 SD70溝跡 (2) 1. C期溝跡全景 (北から)

- | | | |
|-------|-----------------|---------------------------|
| | | 2. B-B' 土層断面 (南から) |
| | | 3. C-C' 土層断面 (南から) |
| 図版 6 | SD71・76・78・83溝跡 | 1. 全景 (南から) |
| | | 2. SD71溝跡完掘状態全景 (南から) |
| 図版 7 | SD74・75・85溝跡 | 1. SD74・75溝跡全景 (南東から) |
| | | 2. SD85溝跡全景 (南東から) |
| 図版 8 | SB52掘立柱建物跡 | 1. 全景 (東から) |
| | | 2. 柱穴1-3土層断面B-B' (東から) |
| 図版 9 | SI172住居跡 | 1. 全景 (東から) |
| | | 2. A-A' 土層断面 (北から) |
| | | 3. カマド全景 (南西から) |
| 図版 10 | SI174住居跡 (1) | 1. 全景 (西から) |
| | | 2. 構築時全景 (西から) |
| 図版 11 | SI174住居跡 (2) | 1. 遺物出土状態 (南から) |
| | | 2. カマド遺物出土状態 (西から) |
| | | 3. カマド全景 (西から) |
| 図版 12 | SI186住居跡 | 1. 全景 (東から) |
| | | 2. 構築時全景 (東から) |
| 図版 13 | SI192住居跡 (1) | 1. 全景 (西から) |
| | | 2. 構築時全景 (西から) |
| 図版 14 | SI192住居跡 (2) | 1. 遺物出土状態 (西から) |
| | | 2. カマド全景 (西から) |
| | | 3. カマド復元状態 (西から) |
| 図版 15 | SI194住居跡 | 1. 全景 (南から) |
| | | 2. 遺物出土状態 (西から) |
| 図版 16 | SK311・368土坑 | 1. SK311土坑全景 (北から) |
| | | 2. SK368土坑全景 (東から) |
| | | 3. SK368土坑A-A' 土層断面 (南から) |
| 図版 17 | SK372~375・392土坑 | 1. SK372~375土坑全景 (北から) |
| | | 2. SK372~375土坑全景 (東から) |
| | | 3. SK392土坑全景 (東から) |
| 図版 18 | SK393・394土坑 | 1. SK393土坑全景 (南から) |

2. SK394土坑全景（西から）

3. SK394土坑B-B' 土層断面（西から）

- 図版19 SD70溝跡 出土遺物（1）
図版20 SD70溝跡 出土遺物（2）
図版21 SD70溝跡 出土遺物（3）
図版22 SD70溝跡 出土遺物（4）
図版23 SD70・71溝跡、SI172・174・186住居跡 出土遺物（5）
図版24 SI192住居跡 出土遺物（1）
図版25 SI192住居跡 出土遺物（2）
図版26 SI192住居跡 出土遺物（3）
図版27 SI194住居跡、SK368・393土坑、遺構外 出土遺物
図版28 文字瓦一覽

I 調査に至る経緯

国分寺市教育委員会は、東京都千代田区平河町1丁目4番9号に所在する(株)日東建設から、自社が所有する国分寺市西元町3丁目1,380番にて分譲住宅建設に伴う宅地造成工事を行う旨の発見届けが提出されたことを受けて、当該造成予定地が武蔵国分寺跡No.19として周知の遺跡内にあることから、埋蔵文化財の事前発掘調査が必要な場所であることを回答し、発掘調査に向けての協議を行った。

発掘調査を実施する範囲については協議の段階で建物配置や埋設管の位置など詳細な計画図面が完成していないことから、該当地全域を調査対象とした。このような状況で調査計画を立案し、これに基づいて「(株)日東建設所有地本調査実施要綱」を策定した。

I. 調査対象

所有地全面を調査対象とする。 調査面積 1,623㎡

II. 予想時代

武蔵国分寺関連（奈良・平安時代）の住居跡、溝跡等が予想される。

III. 調査体制

調査員	2名	調査補助員	1名
発掘作業員	10名	整理作業員	4名

IV. 調査方法

調査地は、遺構（住居跡、溝跡等）の確認面が約1mと深いため、表土を一部調査地外に搬出し、A・Bの2地区に分けて調査を実施する。

- | | |
|----------------------|--------|
| ① 発掘区設定 | ② 表土除去 |
| ③ 遺構確認 溝跡2条、住居跡6軒を予想 | ④ 遺構発掘 |
| ⑤ 写真、実測 | ⑥ 埋め戻し |
| ⑦ 測量 | |

V. 調査期間

現地調査 約4ヶ月（実働88日） 整理 約3ヶ月（実働66日）

上記の内容に基づき、昭和53年6月1日より現地調査に入った。



第ヶ蓮座寺跡

尼寺

武蔵国分寺跡

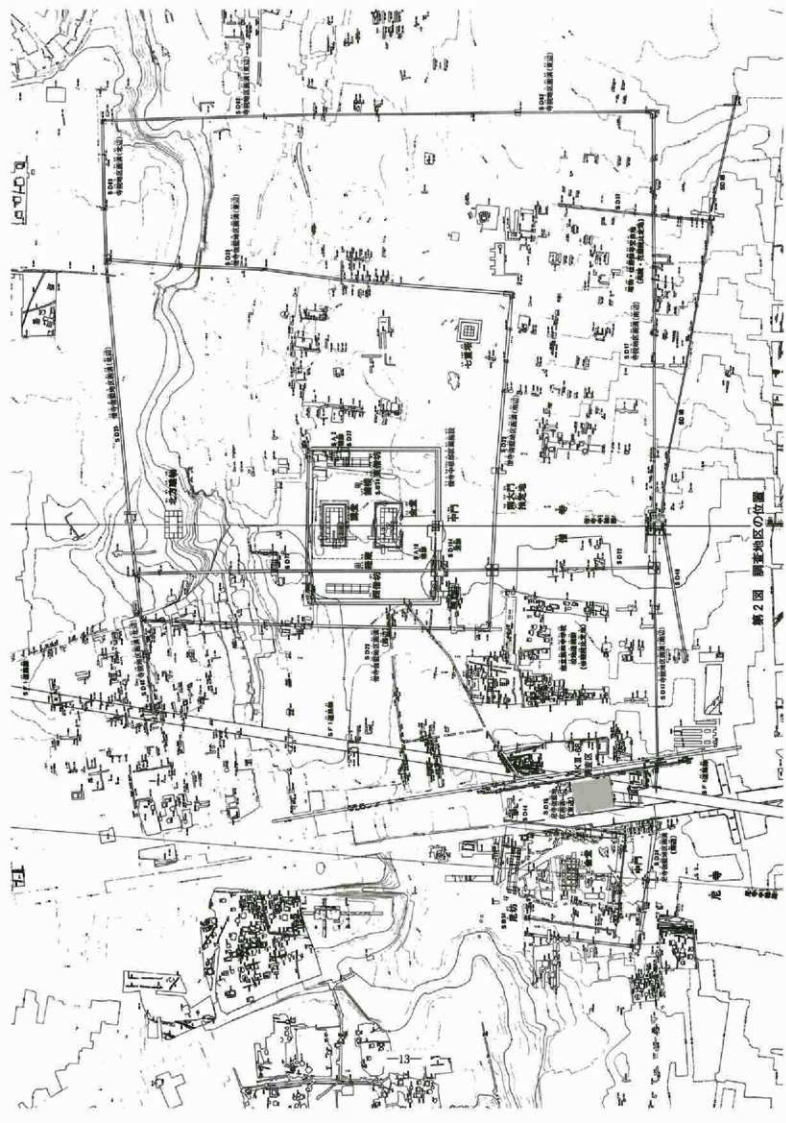
SF1道路状遺構
(推定古代東山道)

武蔵国府推定地

北馬場

国分寺市

第1号遺構 ●



第2図 阿曇地区の位置

II 発掘経過

昭和53年6月1日よりA地区の調査を開始し、9月末日現在、実質74日目を終えたところでA地区の調査を完了した。A地区 510㎡（調査対象の約31%）

実施要綱に基づく調査の経過は次の通りである。

1. 調査地全域を便宜的に3区分（南よりA・B・C地区）し、A地区より発掘調査を実施した。
2. A地区について機械を導入し、盛土及び表土の除去を行う。遺構確認面までの深さは平均70cm程であり、全体に攪乱（最近の掘削）が著しい。
3. A地区西側より順次手掘りによる表土除去を行ったが、攪乱が著しいため、ガラが多く困難をきわめた。遺構確認の結果、溝跡7条、堅穴住居跡3軒、土坑2基を検出した。
4. A地区検出遺構の発掘を開始したところ、当初予想していた西側南北溝跡（SD70）の規模が大きく（一般的には幅2m、深さ1.2m程）、しかも、3時期あることが判明し、調査の進行に多大な影響を及ぼした。

A地区調査終了後、調査の進行に伴い、調査工程の変更が必要となった。よって、調査予算の補正と調査期間の延長について、昭和53年10月5日の協議にて以下の通りになった。

1. 調査期間

実働 106日 予備日 22日 計 128日の延長

変更後調査期間

当初計画 昭和53年6月1日～昭和54年3月31日（全体）

昭和53年6月1日～昭和53年10月15日（現地調査）

変更後 昭和53年6月1日～昭和54年10月31日（全体）

昭和53年6月1日～昭和54年4月15日（現地調査）

2. 府中街道沿いの地域（東西5m、南北45m）は都市計画道路路予定地のため、将来調査が可能であることから、今回の調査対象から外す。

調査開始後実質74日でA地区の調査を完了した。

調査の終了が近付くにつれて、その内容の豊富さから当初予定された報告書作成期間の見直しが迫られてきた。よって、昭和54年9月18日の協議により、以下の通り打ち合わせた。

I. 再契約時の計画

整理期間 昭和53年6月1日～昭和54年10月31日（実働88日）

II. 整理遅延の理由

II 発掘経過

1. 遺物の出土点数、約10,000点（平箱にして70箱）を数える。

2. 作業要員の不足

III. 整理期間の延長

1. 作業定員5名に対して、現在までの1日平均人員は約2名であり、今後も予定人員の確保は困難のため、6ヶ月の日数が見込まれる。

2. 調査員が専従して行う作業（遺物写真撮影・報文執筆）は、他の緊急調査等により専従は困難であり、断続的な長期継続作業になることが予想される。

3. 1・2により、整理期間を以下の通り変更したい。

昭和53年6月1日～昭和55年3月31日（但し、印刷所入稿まで）

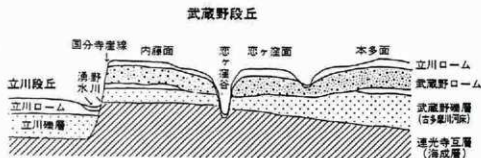
調査は昭和54年4月15日に全行程を終了した。最終調査面積は1,269㎡である。

調査終了後、継続して報告書作成作業を武蔵国分寺遺跡調査会事務所で行ったが、作業の途上において研究の進展に伴い、新たな知見等が得られたため、整理作業を継続することとした。その成果を平成15年3月31日に正式報告書として刊行した。

Ⅲ 調査地区の概観

1. 調査地区の位置・立地

本書で報告される調査地区は西元町3丁目1.380にあり、国分寺市内でも遺跡が集中する地域である。当該地域について述べる前に国分寺市の地形的特徴について概観する。



第3図 国分寺市の地形模式図

国分寺市は当地の人々がハケ(崖・峽)と呼ぶ「国分寺崖線」(以下崖線と記す)によって市域を南北に分けられている。崖線は武蔵野台地が古多摩川によって削られて形成された浸食崖であり、その高低差は西町5丁目で約5m、西元町付近で約12m、東元町1丁目と南町の境で約16mとなり、崖上(北側)を「武蔵野段丘(標高77m)」と、崖下(南側)を「立川段丘(標高65m)」と称する。さらに崖線直下から湧き出す湧水を集めて「野川」が立川段丘面を東流する。野川は武蔵野台地を開析して、本多面・恋ヶ窪面・内藤面の3台地を形成している。武蔵野面には野川の溺れ谷である本多谷・殿ヶ谷戸谷・さんや谷・恋ヶ窪谷があり、立川段丘面には黒鐘谷がある。崖線及び野川流域の地形は起伏に富んだ様相を呈しており、このような地形を利用して旧石器時代・縄文時代・歴史時代の各時代に亘って人々の生活が営まれてきた。

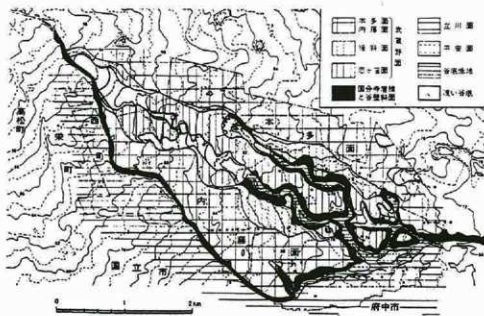
本調査区は、地形的には国分寺崖線の下で立川段丘面に位置するが、崖線の際からは南に約220mの地点に当たり、湧水や湿地の影響を受けない比較的平坦な地形である。歴史的な環境を見ると、先史時代(旧石器・縄文時代)には、調査区南約200mの地点で、東京八王子道路(通称東八道路)の建設工事に伴う事前調査により縄文時代中期の礫群が検出されているが、数量としては少ない。主たる遺跡は武蔵国分僧寺跡を中心とした歴史時代であり、本稿においても該期の遺跡について記述する。

本調査区は武蔵国分僧寺跡の南西域に当たり、僧寺金堂の心々から南西約380mに位置し、寺院地の南端に近い地点である。また尼寺の伽藍地東側にあり、既往の調査成果から調査区内西側に尼寺伽藍地区画溝(東辺)が存在する地点であり、SF1道路状遺構(通称「東山道武蔵路」)が調査区内東側を南北に通過する。さらに調査区南側約50mでの第317次調査において、僧寺

III 調査地区の概観

寺院地区画溝(南辺)とSF1道路状遺構が接続(或いは切り合う)している。さらに、現道である府中街道を挟んで東側にある国分寺市立第四中学校の調査では、10世紀末から11世紀初頭の掘立柱建物跡40棟、竪穴住居跡90軒等が検出されている。竪穴住居中には鍛冶工房と考えられる遺構も3軒検出されており、僧尼寺中間地点として、また寺の修繕等を行う「修理院」的な集落であった可能性が指摘されている。

このような状況から、本調査地周辺は、僧寺寺院地の南端に位置しながらも、僧・尼寺の中間地点の一部であり、さらにSF1道路状遺構が通過する地点でもあり、複雑な様相を呈している。これらの遺構群は、一時期に同時に存在したのではなく、武蔵国分寺の変遷に強く関連したと考えられる。



第4図 地形面分布図

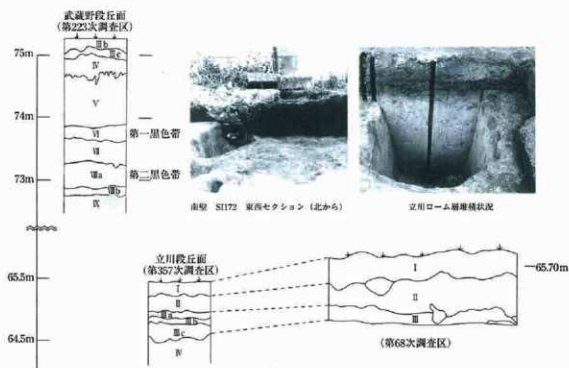
2. 層 序

調査地区は武蔵野段丘縁辺部から立川段丘の平坦部に点在する。当該調査区では層厚により、第5図の標準層序ではⅠ～Ⅲ層と分層したが、周辺地域との比較から以下にその基本層序を略記する。

- I a 層 盛土。ローム、砂利、コンクリートブロックなどの客土。層厚10～40cm。全体に見られる。
- I b 層 表土。耕作土。粘性弱い。暗褐色で、乾燥するとバサバサして崩れやすい土。層厚10～30cm。
- II 層 黒褐色土。粒子粗い。粘性弱い。層厚10cm。歴史時代の遺構内の堆積土に似る。

III 調査地区の概観

- III a 層 暗茶褐色土。粒子やや粗く、粘性やや弱い。II層、III b層との境は、漸移的。層厚10~20cm。
- III b 層 暗茶褐色土。III a層より明度高い。下部にいくに従って、褐色味が強くなる。本層の上面で歴史時代の遺構が検出しやすくなる。縄文時代の遺物を多く含む。層厚約30cm。
- III c 層 茶褐色土。ローム漸移層。上部に縄文時代の遺物を多く包含する。上面で縄文時代の遺構を確認しやすくなる。層厚10~20cm。



第5図 調査区基本土層図

IV 検出遺構

本次調査において、歴史時代 掘立柱建物跡1棟、住居跡5軒、溝跡4条、土坑14基、道路状遺構1条、小穴30個、縄文時代 土坑4基、小穴38個を検出し、その内全容が把握可能な遺構について以下記述する。

なお、溝跡の中でSD71・76・77・78・83・86はSF1道路状遺構を構成する溝である。

1. 歴史時代検出遺構

SD70溝跡（図面2・図版4・5）

僧寺中軸線南223.02～265.10m、西291.03～296.95mの範囲で確認した。主軸は僧寺中軸線にはほぼ平行する。当溝は南北に延びる尼寺伽藍地東辺区画溝である。調査区北壁付近（尼寺金堂の東側延長上）の確認面上に硬質な面を直径約6m、深さ35cmで検出した。当初土橋の可能性を考えたが、当溝とは直接関係ないことを確認した。また調査区南壁付近の東側でSI172と切り合う。しかしSD70のどの時期で切り合っているかは確認できなかった。溝の変遷は3時期あり、(古)C→B→A期(新)とする。残存規模は上面幅 C期2.92～4.54m以上、B期1.43～2.40m以上、A期3.63～5.04m、底面幅 C期2.35～2.48m、B期0.34～1.18m、A期1.10～1.88m、深さC期0.82～1.44m、B期1.24～1.74m、A期0.75～1.32mを測る。断面は逆台形から浅い皿状に変化する。堆積土層 C期は0.5～2mm大のローム粒が多く混入し、0.5～1mm大の黒色土粒、1～2cm大のローム・黒褐色ブロックを含む黒褐色～暗黄褐色土で壁際は比較的硬質で締まる。B期は0.5～1mm大以下のローム粒が多く混入し、部分的に0.5～1mm大の赤褐色土粒が若干と、1～3cm大のロームブロックを含む黒褐色～暗黄褐色土で底面は粘質及び硬質で締まる。A期は木の根などの攪乱が多く、確認面・底面に硬質部分がある。また0.5～2mm大のローム粒・黄褐色土粒が多く混入し、0.5～3mm大の焼土粒、1～2cm大のロームブロックを含む黒褐色土が主体である。

遺物は土師器 坏・壺・甕（図面11-2～11）、須恵器 坏・皿・碗・鉢・蓋・甕（図面10-1～3・図面11-12～20・図面12-1～20・図面13-1）、灰軸陶器 坏・皿・手付短頸瓶（図面13-2～5）、甕瓦（図面10-4～6・図面13-6）、宇瓦（図面10-7・8・図面13-7）、男瓦（図面10-9・図面13-8～12・図面14-1・2）、女瓦（図面10-10～15・図面14-3～10・図面15-1～3）、埴（図面11-1）、砥石（図面15-4）、金属製品 刀子・鏡前・鉄釘・鉄鎌（図面15-5～10）等が出土した。

SD71溝跡（図面3・図版6）

当溝は僧寺・尼寺中間地を南北に延びる道路状遺構(SF1)の道路面である。僧寺中軸線南230.57~261.34m、西269.04~276.48mの範囲で確認した。主軸はN-4°-Eである。南246mより北側、西270mより東側は調査区外へ延びる。SD76・77・78・83・86が同様に平行して延び、その間(SD76~83の間)溝心々で12mを測るが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡がなく凹地(SD71)となっていて部分的に硬質面が見られる。よってSD76が西側側溝、SD83が東側側溝であり、SD78・86は道路幅が狭くなった時の側溝の可能性がある。また南246m付近でSD74・75・85が横切る。新旧関係は(旧)SD71→SD74→SD75→SD85(新)である。溝の変遷は少なくとも2時期(後の調査で4時期の変遷を確認)あり、規模は上面幅 1期3.68~6.4m 2期0.66~6.03m、底面幅 2期2.58~3.84を測る。深さは 1期10~35cm、2期20~41cmを測る。断面は皿状と推定する。堆積土層は全体的に0.5mm大以下のローム粒を含み、下層にいく程硬質で締まる黒褐色~暗黒褐色土が主体である。また南246~261m、西270~276mの範囲でSD78・83の間に波板状の掘り込みが見られる。その範囲内には37個の小穴があり、小穴の規模は長径0.38~1.71m、短径0.23~0.83mを測る。平面形は円形~不整形円形が7個、楕円形~不整形楕円形が30個ある。断面は皿状~浅いU字状を呈する。小穴の堆積土層は暗褐色土が主体で溝底面の硬化面を形成し、なお覆土中には小砂利が多く含まれる(巻頭図版4-3)。

遺物は須恵器 埴・壺(図面16-1・2)、鍔瓦(図面16-3・4)、宇瓦(図面16-5)、女瓦(図面16-6~9)等が出土した。

SD74溝跡(図面3・図版7)

僧寺中軸線南233.24~247.36m、西266.50~288.94mの範囲で確認した。主軸はN-47~61°-Wである。北西から南東方向に延びる溝である。SD75・85が同様に重複して延び共にSD71・76を横切る。新旧関係は(旧)SD71→SD74→SD75→SD85(新)である。残存規模は上面幅0.14~1.78m、底面幅0.08~0.52m、深さ0.14~0.76mを測る。断面は逆台形を呈し上層近くで大きく開く。堆積土層は上層はほとんどSD85に削平されるが、SD85より全体的に0.5mm大のローム粒の混入が多い黒褐色土が主体である。下層は0.5~3mm大のローム粒、1~8cm大のロームブロック、若干の黒褐色土が混じり良く締まり硬質な暗茶褐色~暗黄褐色土が主体である。SD71を横切る地点で茶褐色土硬質面が見られる。

遺物は宇瓦、女瓦、埴が出土した。

SD75溝跡(図面3・図版7)

僧寺中軸線南232.84~248.76m、西266.36~288.52mの範囲で確認した。主軸はN-47~60°-Wである。北西から南東方向に延びる溝である。SD74・85が同様に重複して延び共にSD71・76を横切る。新旧関係は(旧)SD71→SD74→SD75→SD85(新)である。残存規模は上面幅0.43~1.15m、底面幅0.3~0.54m、深さ24~70cmを測る。断面は逆台形を呈し中層近くから緩やかに

開く。堆積土層は上層はほとんどSD85に削平されるが、全体的に2mm以下のローム粒の混入が多い黒褐色土が主体である。下層は0.5～5mm大のローム粒、1～3cm大のロームブロック、黒褐色土が混じる暗黄褐色土が主体である。SD71を横切る地点で茶褐色土硬質面が見られる。

遺物は出土しなかった。

SD76溝跡 (図面3・図版6)

当溝は僧寺・尼寺中間道を南北に延びる道路状遺構(SF1)の西側側溝である。僧寺中軸線南220.48～261.60m、西274.96～281.58mの範囲で確認した。狭長な土坑が連続する形態の南北溝である。主軸はN-9°-Eである。SD71(SF1)・77・78・83が同様に平行して延びるが、SD77は途中南246～249m付近のみ平行する。また南241m付近でSD74・75・85が横切る。新旧関係は(IH)SD71→SD74→SD75→SD85(新)、(IH)SD76→SD85(新)である。規模は上面幅0.26～0.66m、底面幅0.14～0.42m、深さ24～54cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土層 上層は全体的に0.5～2mm大のローム粒の混入が多く硬質で締まる黒褐色土が主体である。下層は1～3cm大のロームブロック、黒褐色土が混じる茶褐色～暗黄褐色土が主体である。

遺物は女瓦が出土した。

SD77溝跡 (図面1)

僧寺中軸線南246.58～249.45m、西279.60～280.46mの範囲で確認した。主軸はN-7°-Eである。SD71(SF1)・76・78・83が同様に平行して延びる。但し、発掘調査の段階では単独の溝として捉えられSD76・78・83の様に南北に長く連続する溝としては把握されていない。規模は全長2.88m、上面幅0.30～0.54m、底面幅0.19～0.39m、深さ10～26cmを測る。断面は皿状～U字状を呈する。堆積土層は1mm大以下のローム粒を含み、目が粗く比較的硬質な黒褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SD78溝跡 (図面3・図版6)

当溝は僧寺・尼寺中間道を南北に延びる道路状遺構(SF1)が狭くなった時の側溝と考えられる。僧寺中軸線南246.98～261.10m、西275.18～276.48mの範囲で確認した。主軸は南252.5mより北側はN-8°-W、南253.6mより南はN-3°-Eである。SD71・76の間で延びる南北溝である。規模は上面幅0.46～0.96m、底面幅0.15～0.47m、深さ12～20cmを測る。断面は皿状を呈する。堆積土層は全体的にローム粒と1mm大のスコリアを含み、目が比較的荒くバサバサしている黒褐色土が主体である。底面は硬質で粘りがあるが、上面はバリバリしている。確認面上全体に帯状の硬質面が見られる。

遺物は埴が出土した。

SD83溝跡 (図面1・図版6)

当溝は僧寺・尼寺中間地を南北に延びる道路状遺構(SF1)の東側側溝である。僧寺中軸線南249.74~259.36m、西267.12~269.48mの範囲で確認した。主軸はN-9°-Eである。SD71(SF1)・76・77・78が同様に平行して延びる。規模は全長9.7m、上面幅0.40~0.76m、底面幅0.18~0.32m、深さ16~23cmを測る。断面は皿状~逆台形を呈する。堆積土層は暗黒褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SD85溝跡 (図面3・図版7)

僧寺中軸線南226.50~248.76m、西266.36~294.90mの範囲で確認した。主軸はN-50~65°-Wである。北西から南東方向に延びる溝である。SD74・75が同様に重複して延び共にSD71・76を横切る。新旧関係は(旧)SD71→SD74→SD75→SD85(新)、(旧)SD76→SD85(新)である。規模は上面幅0.7~1.96m、底面幅0.54~1.68m、深さ10~49cmを測る。断面は皿状~逆台形を呈する。堆積土層は全体的に0.5mm大のローム粒が多量に混入し比較的目的が締まり硬質な黒褐色土が主体である。また底部は部分的に0.5mm大の焼土粒が多く混入する。SD71を横切る地点で部分的に茶褐色土硬質面が見られる。

遺物は出土しなかった。

SD86溝跡 (図面1)

当溝はSD78の延長として考えられる。やや蛇行するがSD78同様に道路状遺構(SF1)が狭くなった時の側溝と考えられる。僧寺中軸線南231.59~241.98m、西272.70~276.00mの範囲で確認した。主軸はN-18°-Eである。SD71・76の間で延びる南北溝である。規模は上面幅0.32~0.72m、底面幅0.16~0.37m、深さ9~16cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土層は全体的に黒褐色土の混入が多く部分的に1mm大のスコリアを含み粘質で硬く非常に締まる暗黒褐色~暗黄褐色土が主体である。確認面上全体に溝状の茶褐色土硬質面が見られる。

遺物は出土しなかった。

SB52掘立柱建物跡 (図面3・図版8)

僧寺中軸線南231.04~239.30m、西301.54~305.38mの範囲で確認した。建物の東側部分のみ検出する。主軸は梁行でN-25°-Eである。今次調査で1-1・1-2・1-3・2-3(東側より)を検出した。南北2間の東西棟掘立柱建物である。建物の規模は桁行1間(確認部分)約3.1m、梁行2間 約3.6mの等間である。なお柱穴は2時期ありほぼ同じ位置で掘り直しが見られる。新旧関係を(旧)B期→A期(新)とする。柱穴の規模はA期で長径0.58~0.88m、短径0.50~0.81mを測り、平面形は不整形円形~隅丸長方形を呈する。深さ0.29~0.61mを測り、断面は皿状~U字形を呈する。柱痕跡は柱穴1-2・1-3・2-3で認められる。堆積土層はA期は黒褐色土が主体

で全体的に0.5mm大のローム粒の混入が多く比較的良く締まり硬質である。柱穴は黒褐色土だが他に比べ軟質で目が粗い。B期は全体的に0.5～3mm大のローム粒、2～5cm大のロームブロックを多く含む黒褐色～暗黄褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SI172住居跡（図面4・図版9）

僧寺中軸線南261.00～264.16m、西289.40～292.26mの範囲で確認した。主軸はN-44°-Eである。西側はSD70と切り合い、東側は一部攪乱を受ける。カマドは北東の隅で検出した。住居の残存規模は東西2.72m、南北2.90mを測り、平面形は長方形と推測する。壁高は26～34cmを測り、断面は逆台形を呈する。床面は貼り床を施す。住居の堆積土層は全体的に1mm大のローム粒を多量に含む部分的に1mm大の焼土粒を若干含む黒褐色土が主体で、床面に近い程1～4mm大のローム粒、焼土粒が増す。上層は硬質である。周溝は幅22～38cm、深さ8～10cmを測り北壁と南壁で検出した。周溝の堆積土層はローム粒を多く含む暗黄褐色土が主体である。また南東の隅と構築時に住居中央やや東寄りに一辺48～64cm、深さ10～12cm、平面形は円形の小穴を2個検出した。小穴の堆積土層は黒褐色土と、黒色土が混入し硬質で締まりのある暗茶褐色土である。カマドの規模は奥行き1.25m、幅1.04m、内幅0.7m、確認面からの深さ27cm、焚き口は火床面からさらに10cm掘り込む。袖は右袖のみ検出した。カマドの北側に掘り込みがありそれによりカマドが歪む。壁側と焚き口に瓦が補強材として使用され、火床は35×30cmの範囲が赤く焼けていた。カマドの堆積土層は0.5mm大以下の焼土粒、1cm大の焼土ブロック、0.5～2mm大の炭化粒を多く含む黒褐色～暗赤褐色土が主体である。

遺物はカマドと住居北側部分に多く、須恵器 坏（図面16-10・11）、女瓦（図面16-12～14）等が出土した。

SI174住居跡（図面5・図版10・11）

僧寺中軸線南254.38～257.44m、西281.42～284.83mの範囲で確認した。主軸は僧寺中軸線に直交する。西側の一部と南側は攪乱を受ける。カマドは東壁中央で検出した。住居の残存規模は東西2.74m、南北3.04mを測り、平面形は長方形を呈する。壁高は32～34cmを測り、断面は逆台形を呈する。床面は貼り床を施す。住居の堆積土層は全体的に0.55mm大以下のローム粒を多量に含む黒褐色土が主体で、床面近くは部分的に0.5～1mm大のローム粒、焼土粒が増す。周溝は幅9～22cm、深さ4～10cmを測り住居北側半分で検出した。周溝の堆積土層は0.5mm大のローム粒を比較的多く含む黒褐色土が主体である。住居中央やや東寄り（カマド寄り）に長径38～54cm、短径18～25cm、の楕円形で焼土を混入した小穴を2個検出した。また構築時に南東の隅を除く3隅と住居中央に浅い掘り込みを6個検出した。南西隅には2個並んでいる。規模は長径36～66cm、短径18～62cm、の円～楕円形である。カマドの規模は奥行き1.12m、幅

0.96m、内幅0.6m、確認面からの深さ45cmを測る。袖は左右検出し粘土で構築され、全長44～54cm、幅25～30cmを測る。瓦が補強材及び支脚として使用され、火床は50×45cm、厚さ7～10cmの範囲で焼土が堆積する。カマドの堆積土層は0.5～1mm大のローム粒・焼土粒を多く含む黒褐色～暗赤褐色土が主体である。

遺物は土師器 坏・甕（図面17-1・2）、須恵器 坏・皿（図面17-3・4・6・7）、灰釉陶器 皿（図面17-5）、男瓦（図面17-8）、女瓦（図面17-9・10）等が出土した。

SI186住居跡（図面6・図版12）

僧寺中軸線南254.06～258.80m、西285.05～289.56mの範囲で確認した。主軸はN-96°-Eである。西壁部分とカマド付近のみ検出する。カマドは東壁中央で検出した。住居の残存規模は東西4.3（カマド確認まで）m、南北4.86mを測り、平面形は長方形と推測する。壁高は24cmを測り、断面は逆台形と推測する。床面は貼り床を施す。住居の堆積土層は全体的に0.5～1mm大のローム粒と焼土粒、スコリアを多量に含む黒褐色土と暗黄褐色土が主体である。周溝は幅20～45cm、深さ3～7cmを測り、住居西側と南側一部で検出した。周溝の堆積土層はローム粒を多く含む暗黄褐色土が主体である。住居南側半部に長径39～57cm、短径28～44cm、の円～不整形円形の小穴を4個検出した。断面は皿状～U字状である。小穴の堆積土層は黒褐色土が主体である。カマドの規模は奥行き0.76m、幅0.70m、確認面から火床面までの深さは8cmを測り、ほとんど焼土が堆積する。焚き口は火床面からさらに30cm掘り込む。火床は49×34cmの範囲で焼土が堆積する。カマドの堆積土層は焼土、灰、炭化物が多く含まれる赤褐色～暗赤褐色土が主体で、焚き口部の掘り込みはボソボソのローム粒とロームブロックを含む茶褐色土である。

遺物は須恵器 坏・鉢（図面17-11・12）、女瓦（図面17-13）等が出土した。

SI192住居跡（図面7・図版13・14）

僧寺中軸線南244.20～246.48m、西283.37～286.16mの範囲で確認した。主軸はN-86°-Eである。北壁部分と西壁の一部に攪乱を受け、SI194と重複する。新旧関係は（旧）SI194→SI192（新）である。カマドは東壁中央で検出した。住居の残存規模は東西2.4m、南北2.23mを測り、平面形は方形と推測する。壁高は20cmを測り、断面は逆台形を呈する。床面は貼り床を施す。住居の堆積土層は全体的に0.5～1mm大のローム粒と焼土粒を多量に含み、若干0.5～4mm大の炭化粒を混入する黒褐色土が主体である。上層は比較的硬質で締まる。周溝は幅18～28cm、深さ4～7cmを測り、住居西側一部と、南側カマド立ち上がりまで検出した。周溝の堆積土層は黒褐色土が主体である。構築時に住居北西隅に長径77cm、短径66cm、深さ28cmの不整形の小穴を1個検出した。断面は東側が攪乱を受けるため逆丁字状である。カマドは北側に攪乱を受けるが、1枚の女瓦を奥壁に、2枚の女瓦を側壁に、2枚の男瓦を焚き口部に、そし

て埴を支脚に使用して構築している。規模は奥行き0.79m、幅0.58m、確認面から火床面までの深さは22cmを測る。焚き口は火床面からさらに17cm掘り込む。火床は41×34cm、厚さ4cm程の範囲で焼土が堆積する。カマドの堆積土層は0.5mm大の黄褐色土粒、0.5～1mm大の焼土粒を多量に含み、1mm大の炭化粒を若干含む黒褐色～暗黄赤褐色土が主体で、火床面は1cm大の焼土ブロックを多く含む。

遺物は土師器 甕（図面18-1）、須恵器 坏（図面18-2～5）、灰釉陶器 碗（図面18-6）、男瓦（図面18-7・8）、女瓦（図面18-9・10・図面19-1・2・図面20-1・2）、埴（図面18-11）等が出土した。

SI194 住居跡（図面7・図版15）

僧寺中軸線南243.86～246.06m、西283.38～286.50mの範囲で確認した。主軸はN-90°-Eである。SI192と重複し、西・南壁の一部が検出するのみである。新旧関係は(旧)SI194→SI192→SK368(新)である。床面はSI192とSK368の幅20cmの範囲で二重になり、2層目床面のその範囲でカマドを検出した。住居の残存規模は東西・南北共に3.14mを測り、平面形は方形と推測する。壁高は18cm（改築前は10cm）を測り、断面は逆台形と推測する。住居の堆積土層は全体的にローム土を多量に含み、目は締まるがバサバサする黒褐色土が主体である。周溝は幅14～28cm、深さ4～6cmを測り、住居西・南壁一部で検出した。周溝の堆積土層は0.5mm大の黒色土粒を含み硬質で締まる黒褐色土が主体である。カマド付近で長径28～42cm、短径16～36cm、深さ7～22cmの不整円～楕円形の小穴を構築時に1個、改築後に2個検出した。断面は掃り鉢状～J字状である。カマドの残存規模は奥行き20cm、幅46cm、住居床面からの深さは14cmを測る。確認面積が1㎡にも満たないため、SI194より古い住居の床面か改築前の床面かは確認できない。カマドの堆積土層は黒褐色～暗赤褐色土が主体である。

遺物は灰釉陶器 手付短頸瓶（図面21-1）、女瓦（図面21-2・3）等が出土した。

SK311土坑（図面8・図版16）

僧寺中軸線南248.62～250.02m、西272.69～274.04mの範囲で確認した。規模は長径1.42m、短径1.36mを測り、平面形は円形を呈する。深さは57cmを測り、断面は箱形を呈する。堆積土層は黒褐色土単一層で、全体的に1～5cm大のロームブロックを含み、軟質である。

遺物は出土しなかった。

SK312土坑（図面8）

僧寺中軸線南252.44～253.34m、西276.42～277.40mの範囲で確認した。規模は長径1.00m、短径0.86mを測り、平面形は円形を呈する。深さは24cmを測り、断面は箱形を呈する。堆積土層は全体的に1cm大のローム粒を含み、軟質な暗茶褐色土が主体である。中央部分にローム土を含む新しい落ち込みが見られる。

遺物は出土しなかった。

SK367土坑 (図面 8)

僧寺中軸線南245.20～245.78m、西279.94～280.92mの範囲で確認した。北側は攪乱を受け、中央やや南寄りに小穴 (P-10) を切り掘られる。残存規模は長径0.98m、短径0.54mを測り、平面形は不整楕円形と推定する。深さは11cm、なおP-10の深さは47cmを測り、断面は皿状+U字形を呈する。堆積土層は皿状の範囲は部分的に0.5mm以下の焼土粒を若干含み、全体的に1～3cm大の粘質な暗茶褐色土ブロックを多量に含む黒褐色土が主体である。U字形のP-10部分は全体的に1～2cm大のロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が主体であり、間層として黒褐色土が1～2cmの帯状に混入する。

遺物は出土しなかった。

SK368土坑 (図面 9・図版16)

僧寺中軸線南245.20～246.62m、西282.14～283.57mの範囲で確認した。西側にSI192・194が接する。新旧関係は(旧)SI194→SI192→SK368(新)である。規模は長径1.48m、短径1.43mを測り、平面形は円形を呈する。深さは54cmを測り、断面は箱形を呈する。堆積土層は全体的に0.5mm大のローム粒、1～5cm大のロームブロックを多量に含み、軟質でバサバサしている暗茶褐色土が主体である。底面近くになると黒色土・ロームブロックが混入し粘性を帯び締まる。

遺物は須恵器 坏 (図面21-4) が出土した。

SK370土坑 (図面 8)

僧寺中軸線南237.23～238.18m、西287.68～288.56mの範囲で確認した。東側は攪乱を受ける。残存規模は長径1.01m、短径0.88mを測り、平面形は不整楕円形と推定する。深さは12cmを測り、断面は皿状を呈する。堆積土層は黒褐色土単一層で全体的に0.5mm大のローム粒を多量に含み硬質で締まる。

遺物は出土しなかった。

SK372土坑 (図面 8・図版17)

僧寺中軸線南226.80～227.53m、西284.50～285.08mの範囲で確認した。SK373・374と重複する。新旧関係は(旧)SK375→SK374→SK373→SK372(新)である。残存規模は長径0.74m、短径0.56mを測り、平面形は不整楕円形と推定する。深さは16cmを測り、断面は皿状を呈する。堆積土層は全体的に0.5～5mm大のローム粒を含み硬質で締まる黒褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SK373土坑 (図面 8・図版17)

僧寺中軸線南227.01～227.74m、西284.50～285.10mの範囲で確認した。SK372・374と重複する。新旧関係は(旧)SK375→SK374→SK373→SK372(新)である。残存規模は長径0.72m、短径

0.32mを測り、平面形は隅丸方形と推定する。深さは16cmを測り、断面は底面がいびつな皿状を呈する。堆積土層は0.5～3mm大のローム粒及び2cm大のロームブロックを部分的に含む黒褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SK374土坑 (図面8・図版17)

僧寺中軸線南227.12～227.92m、西284.37～285.20mの範囲で確認した。SK372・373と重複し、南側でSK375を切る。新旧関係は(旧)SK375→SK374→SK373→SK372(新)である。残存規模は長径0.78m、短径0.76mを測り、平面形は不整形と推定する。深さは46cmを測り、断面は底面がいびつな逆台形を呈する。堆積土層は0.5～5mm大のローム粒及び1～3cm大のロームブロックを多く含み、1～2cm大の黒色土ブロックを部分的に含む黒褐色～暗茶褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SK375土坑 (図面8・図版17)

僧寺中軸線南227.70～228.90m、西284.32～285.58mの範囲で確認した。北側でSK374に切られる。新旧関係は(旧)SK375→SK374→SK373→SK372(新)である。残存規模は長径、短径ともに1.24mを測り、平面形は不整形と推定する。深さは58cmを測り、断面は底面がいびつな逆台形を呈する。堆積土層は0.5～5mm大のローム粒及び1～3cm大のロームブロックを多く含み、1cm大の黒色土ブロックを多く含む暗黄褐色～暗茶褐色土が主体である。底面は粘質で硬く締まる。

遺物は出土しなかった。

SK392土坑 (図面8・図版17)

僧寺中軸線南225.82～227.15m、西280.23～281.43mの範囲で確認した。規模は長径1.33m、短径1.22mを測り、平面形は円形を呈する。深さは33cmを測り、断面は箱形を呈する。堆積土層は0.5～2mm大のローム粒及び1～2cm大のロームブロックを多く含む暗茶褐色土が主体であり、軟質で締まりがない。

遺物は出土しなかった。

SK393土坑 (図面8・図版18)

僧寺中軸線南227.62～227.96m、西280.16～281.30mの範囲で確認した。南側は攪乱を受ける。残存規模は長径1.14m、短径0.34mを測り、平面形は不整形円形と推定する。深さは11cmを測り、断面は皿状を呈する。堆積土層は黒色土の混入が多い黒褐色土が主体で、目は締まるがバサバサする。

遺物は須恵器 短頸壺 (図面21-5) 等が出土した。

SK394土坑 (図面9・図版18)

僧寺中軸線南222.97～227.30m、西278.38～280.10mの範囲で確認した。西側は攪乱を受ける。残存規模は長径4.36m、短径1.6mを測り、平面形は不整楕円形と推定する。深さは47～60cmを測り、断面は逆台形を呈する。堆積土層は木の根などの攪乱が多く、0.5～5mm大のローム粒、黒色土の混入が多い暗茶褐色土が主体で、上層は硬質で締まる。

遺物は出土しなかった。

2. 縄文時代検出遺構**SK371J土坑** (図面9)

僧寺中軸線南244.31～245.14m、西297.15～297.73mの範囲で確認した。規模は長径0.84m、短径0.52mを測り、平面形は不整楕円形(L字形)を呈する。深さは44cmを測り、断面はV字形を呈する。堆積土層は1mm大のスコリアを若干とローム粒を多く含み、粘質を帯び比較的硬質で締まる暗茶褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SK376J土坑 (図面9)

僧寺中軸線南234.22～235.00m、西300.24～301.17mの範囲で確認した。西側はSK377Jに切られる。残存規模は長径1.04m、短径0.65mを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは16cmを測り、断面は箱形を呈する。堆積土層は1.5mm大のスコリアを若干含み、全体的に黒色土を混入する暗茶褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

SK377J土坑 (図面9)

僧寺中軸線南234.14～234.94m、西300.98～301.78mの範囲で確認した。東側はSK376Jを切る。規模は長径0.96m、短径0.77mを測り、平面形は不整方形を呈する。深さは16cmを測り、断面は箱形を呈する。堆積土層は暗茶褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

3. 分析化学からのアプローチ ～SD70溝跡の堆積状態について～

堀内晶子

はじめに

この分析の目的は、SD70溝跡の堆積状態を、土壌のpHを測定することによって推測しようとするものである。

SD70溝跡は、武蔵国分僧寺の西側及び同尼寺の東側に位置し、僧寺と尼寺を面する溝と推

定される。現場担当者の眼から見ると、この溝は3期に亘って用いられたのではないかと考えられている。つまり、まず第6図aのように、幅約5m、深さ約1.5mの大きな溝が造られる。これが、SD70(図面2)の原形に当たる。次に第6図bに示すように、底面に近い壁面に①及び②が加えられ、溝の底面が減少する。これは、一度溝に堆積物が蓄積した後、第6図Cに③の部分を持ち出したか、あるいは周辺の土壌が流れ込み、①と②の部分に自然堆積したか、いずれかは不明である。最終的にこの溝は、第6図Cに示すように浅くなったまま用いられたようである。これは浅くなった溝の底面(図面2)に示される5層に多量の土器片が包含されていたことから伺われるものである。そこで、この溝の遍歴が科学的に裏付けられるか否かを求めるため、溝に垂直に設けられたセクション上の土壌のpHを測定することになった。

pH

よく知られているように、土壌のpHは土壌の化学的性質を現す一手段であり、土壌中に存在する全ての化学物質から由来する総プロトン濃度 $[H^+]$ を $-\log [H^+]$ で現したものである。したがって土壌のpHを測定することによって土壌の素性の違いを求めることができる。厳密にいうと、土壌のpHには、土壌に直接pH電極を差し込んで測定する土壌pHと、土壌にH₂O又は、KCl、CaCl₂等の溶液を加えて懸濁液として測定する土壌溶液pHの2種類がある。土壌pHは測定方法が簡単で、しかも敏速であるが雨などの影響を受けやすいという欠点がある。ここで言う土壌のpHとは、後者の土壌溶液を意味するものである。pH(H₂O)は土壌中の塩類濃度や季節的変化の影響が大きいため、ここではpH(KCl)を測定した。これはK⁺を加えることによって置換されたH⁺濃度(厳密には活量)を測定するものである。土壌を空気中に放置すると、硝酸化物が生成したり微生物の活動が変化するため、pHの値が変化するのでサンプリング後、速やかに測定する必要がある。

サンプリング

SD70溝跡を直角に切るMKⅢ-68調査地区南壁セクション上の土壌及び溝周辺の土壌を横10cm、縦5cm間隔で、5×5×5cmのサンプルを採集した。また対象として溝の西側約0.6m地点カラムRの土壌も同様に採集し、サンプル数は延べ1,323点に及んだ。

測定方法

生土に約2.5倍の1N KClを加え、攪拌しながら約30分間放置する。懸濁状の土壌溶液にガラス電極を入れ、約30秒経過後、pHメーターの指示を読む。(pHメーター堀場H-7使用)

測定結果及び考察

第1表はpHの測定結果である。このセクション面上に任意の地点にカラムA~Gを選び、各カラム上のpH値と対象土壌を深さに従ってグラフに表すと第7図になる。ここでまず明らかになるのは地表近くではほぼ同一値を示していた溝内部の土壌と、その外部の対象が深くなるに

従って大きくかけ離れてくることである。対象では、地下約30cmまでの表土、土層がpH5.0前後で一番低く、表土下35~40cmのⅢ層で急激に高くなり、その下のローム層に入るとpH5.8前後の高い値となる。腐食土とロームとの区別をここにはっきり見ることができる。溝内部のpHは、一般的に腐食土に近いが底に近づくに従ってゆっくりとロームの値に近づいており自然堆積を思わせるものがある。どのカラムも同じ深さでは、ほぼ同じような値を示している。表土の部分は、当然予想されるようにバラツキが大きく、植物の根や昆虫、小動物、雨や霜などによる極在化や攪乱によるものと考えられる。次は50~70cmの深さに現れる。この部位は丁度3層と4層に当たることに注目したい。もう一ヶ所は深さ95~110cm程の所にある。これは当初、溝が最後に用いられた時期の底面に当たる4・5層ではないかと考えたが、少し上部になっている。全体の測定結果を図式化したのが第8図である。これらの試料は、数週間にわたって採集され測定された。その間気象の変化があつたにもかかわらず、日時の違いによる影響を受けていないことがよく分かる。ここで注目できることは、pH分布がいくつかのグループに区分できることである。そこでセクション上の層を基準にグループ分けをし、サンプル数(n)、平均値(x)、標準偏差(s)を求めてTable 1(第1表上)に示した。またそれらの間に統計的に有意な差があるかどうかを検討するため、t検定を行いTable 2(第1表下)に掲げた。t検定はサンプルが正規分布を示すものに適応できる方法である。このサンプルの場合は必ずしも正規分布にならないものもあるが、一応正規分布になるものとみなして行った。溝の底面を取り囲んでいるローム層を見てみると、対象土壌のロームがpH5.7~6.0のほぼ一定であるにもかかわらず、pH5.3~5.8と変化に富む。pHが高く、内部より高い値を持つ部分が側面に、逆にpHが内部より小さな値を持つ部分が底面に集中している。また側面はpH5.6代とpH5.7代が、壁から張り出している25層を境に分けられ、底面も側面に近い所に位置するpH5.4代の部分とpH5.3代の内、中心である15層の下部とそれぞれ土層に対応した独立グループに分けることができる。溝内部の大きな部分を占める5・15層は、7・13層によって仕切られていて、これも独立している。溝の底面に張り出している東側の24・25層と西側の9・11・12・20層及び18~20層は、pHを見る限りにおいては個別のグループと見られる。また東側から流れ込むように堆積されている10・15・16層は、その下の19~25層とは異なっていて、18~20層は、9~11層の延長ではないと言えよう。このようにpH値は視覚によって区別する土層とほぼ対応しているが、19層のように東側と西側に複数で現れた場合にはpHは必ずしも一致しない。

まとめ

pHが雨などの自然状況に影響されやすく、また浸透することを充分踏まえた上でこのpH測定結果から得られる結論は、この溝が大きく分けて3期に亘って使用されたものと考えられることである。つまり底面下のローム層が3つの底面と1つの壁に分けられることである。これ

は、もともと対象ロームと同様、pHが高かったものが、水を張っていた場合であれば水中に生息する動植物やゴミなどによって、空掘りであれば周辺の植物やゴミなどが吹き溜ったり雨水などによって、底の部分に影響を及ぼしたものと考えられる。土層がはっきりしている場合、pHは変化を数値として読み取ることができたり、グループに分けたりすることができる。しかし特にその意欲を発揮できるのは、同一層内の変化であり、視覚的に識別不可能な違いを明確にすることが可能となる。これが底面下のローム層に現れたpH変化である。本実験では、考古学的に観察された結果を裏付けるものとして重要な役割を果たすと言えよう。

おわりに

ここに挙げた膨大な数のサンプルを分析するに当たって、多くの障害を乗り越えて遂行された遺跡調査会の皆様方に敬意を表したい。サンプリングに当たって、木目細かい注意を払いながら、これだけの数を分析できたことは、統計捜査が可能になったばかりでなく、細部にわたってデータを検討することができた貴重な例として残ることであろう。

Table 1. Average pH(x) and standard deviation (s) of the sampling groups

Sampling Groups	n	x	s	
Reference (Vergin sire)		pH		
humus	8	5.05	0.1907	
loam	31	5.84	0.1190	
total	39	5.68	0.3513	
Inside				
strata	5*	66	5.35	0.0904
	7	43	5.41	0.0661
	13	25	5.42	0.0683
	15	102	5.47	0.0514
	7, 13	68	5.41	0.0636
	18, 19, 20(E)	50	5.53	0.0534
	16, 19~25(W)	102	5.49	0.0463
	16, 19~25(E+W)	152	5.50	0.4423
	20(E)	5	5.43	0.0152
	20(W)	35	5.54	0.0544
Outside **				
(i)		30	5.75	0.0468
(ii)—E		13	5.62	0.0356
—W		15	5.61	0.0306
total		28	5.61	0.0339
(iii)—E		12	5.45	0.0302
—W		14	5.45	0.0558
total		26	5.45	0.0429
(iv)		16	5.34	0.0259

n = no of samples.

E = east side.

W = west side.

* : since no. of samples are large, samples on the columns A~G are taken to represent the entire group.

** : referve to the numbering system on 第8図.

Table 2. Results of t-tests

Groups compared	t	P	comment	
Inside				
strata 5* strata 13	5.271	0.01>	different	
7	13	0.410	0.4~0.3 same(?)	
15	7, 13	6.395	0.01>	different
18, 19, 20(E)	16.19~25(W)	6.096	0.01>	different
15	16.19~25(W)	3.211	0.01>	different
Outside**				
(ii)—E	(ii)—W	0.7996	0.5~0.6 same(?)	
(iii)—E	(iii)—W	xo	same	
(i)	reference loam	12.157	0.01>	different

P = probability of having t this large or larger in size by chance.

E = east side.

W = west side.

* : since no. of samples are large, samples on the columns A~G are taken to represent the entire group.

** : referve to the numbering system on 第8図.

第1表 土壌サンプルpH値測定表(上)・t検定結果表(下)

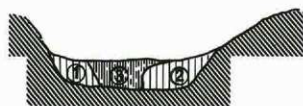
a



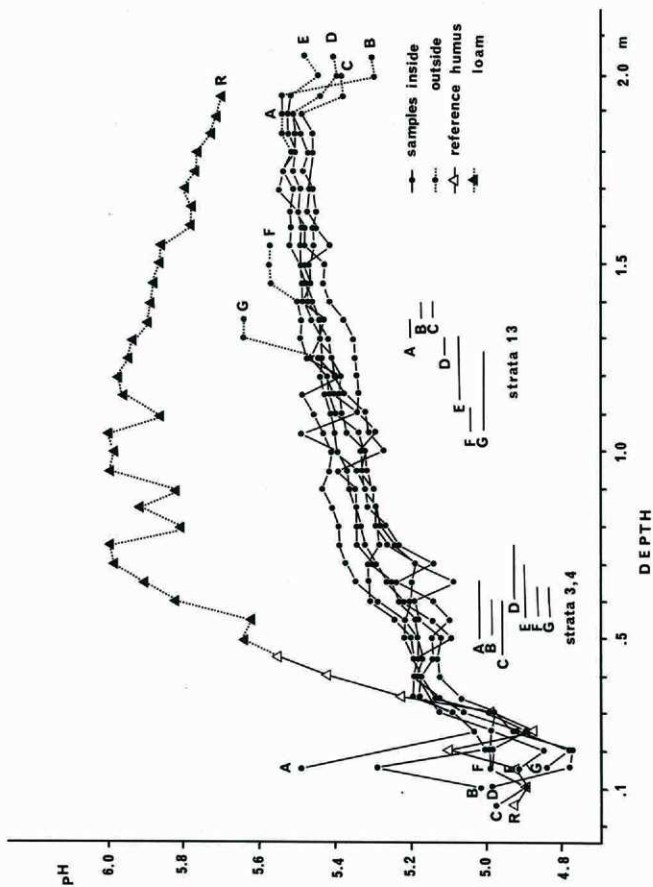
b



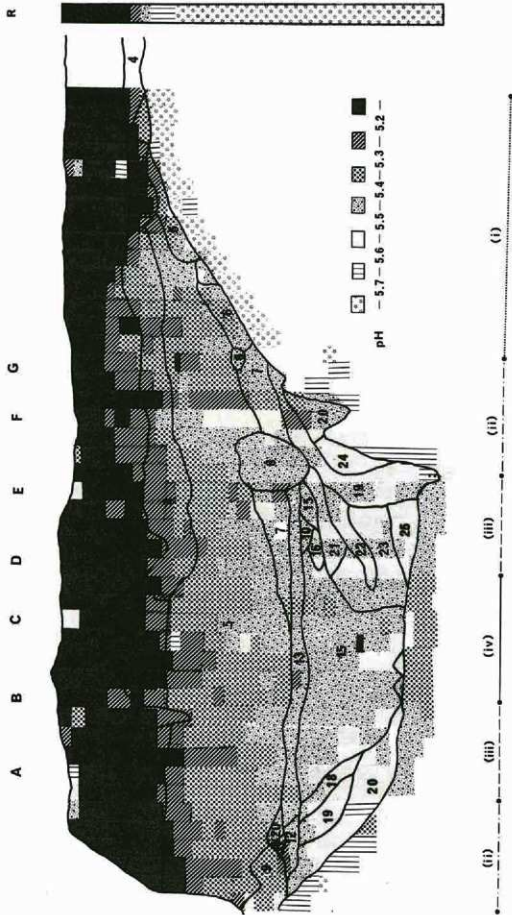
c



第6図 溝埋没状況模式図 (写真は土壤サンプル用メッシュ)



第7図 A~GカラムのpH値



第8圖 pH值濃度分布圖

V 出土遺物

遺物の詳細は一覧表に示した。よってここでは各遺物の概要と傾向について述べる。

1. 土器

出土した土器の種類は土師器、須恵器A・B、灰軸陶器である。器種は坏、皿、碗、鉢、蓋、手付き短頸瓶、壺、短頸壺、甕である。

須恵器坏は法量が計測可能な資料の分布から口径：底径が2：1の比率に近い前内出様式に属すると見られるⅠ群（8世紀末～9世紀代）、2：1～3：1の比率の内で南多摩古窯跡群G25窯式期及び新久Ⅰ式期に相当するⅡ群（9世紀末）、とG5窯式期に相当するⅢ群（10世紀前葉）、3：1以上の比率を示すⅣ群（10世紀後半以降）に分類された（一部例外もある）。なお、灰軸陶器については黒笹 K5・90窯式期（10世紀後半～11世紀前葉）の資料はⅣ群に含めた。

Ⅰ群…図面11-18・19

Ⅱ群…図面11-12・17、図面12-4・7・12・17

Ⅲ群…図面11-13・14・16・20、図面12-1～3・5・6・8・9・13～16・18、図面16-11、
図面18-2～5

Ⅳ群…図面11-15、図面13-2～5、図面17-3・4・7

2. 瓦類

瓦類は溝の覆土から廃棄物として出土した資料と、住居のカマドに構築材として使用された資料である。そのため直接遺構の年代と瓦の型式が相関する例は無いが、SD70溝跡(A期)より出土した七葉蓮華文の鍍瓦が創建期段階に位置付けられる他は、再建期段階の瓦が主体である。破片が多いため種類が判明した瓦類は鍍瓦、宇瓦、男瓦、女瓦、塼である。道具瓦については女瓦を転用した堤瓦(図面14-10)がある。文字瓦は、埜・木・山・父・荏・男・中・七・大・子・田・橋・土が認められた。

3. 石製品

砥石(図面15-4)は、表面に線状のカキキズが数条認められるが、どのような道具を砥ぐことによって生じた痕跡かは不明である。

4. 土製品

紡錘車(図面21-7)が1点表土より出土した。

5. 金属製品

出土した金属製品は刀子、錠前、釘、鉄鎌である。錠前(図面15-7)は欠損が著しいため全容は不明だが、いわゆる海老錠の一部であろうと考える破片である。釘は頭部が楕円形で全長が短い飾り釘(図面15-8)と、全長が15cmを超える角釘(図面15-9)である。鉄鎌は二叉鎌(図面15-10)で先端の分岐部がやや平坦であるのが特徴的である。興味深いことに、金属製品は全てSD70溝跡のA期から出土しており廃棄されたものである。

第2表 出土遺物一覧表(1)

SD70溝跡 土器 一 覧						
図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
10-1 -	須A-壺	A期 Aa層	(18.6) 3.7 -	体部の器厚は薄く、大形である。擬宝珠状のつまみで肩部の縁が緩やかに下がる。口唇部は直立に屈折する。	内外面共にロクロによるナデ。体部上端回転ヘラ削り。貼り付けつまみはナデにより接合されている。	口縁部1/5残存。重ね焼き。外面に火だすき痕あり。
10-2 -	須A-壺	A期 Ab層	(18.7) 4.4 -	体部緩やかに下がり、口唇部やや内傾して屈折する。擬宝珠状のつまみを付す。大形の器形である。	内外面共にロクロによるナデ。天井部から体部上半にかけて回転ヘラ削り。ナデによる貼り付けつまみ。	体部1/2弱残存。口縁部欠損。重ね焼き。内外面に火だすき痕あり。
10-3 19	須A-壺	B期 Ab層	20.4 4.1 -	体部緩やかに下がり、口唇部はほぼ直立に屈折する。擬宝珠状のつまみを付す。大形の器形である。	内外面共にロクロによるナデ。天井部から体部上半にかけて回転ヘラ削り。ナデによる貼り付けつまみ。	2/3残存。口唇部内面自然軸付着。重ね焼き。
11-2 -	土-坏	A期 Ab層	(13.5) (4.5) -	底部(九底と推定)から緩やかに内湾して立ち上がる。全体に肥厚なつくり。破片のため、詳細不明。	ロクロ調整か?口縁部に横ナデ、体部内面に横方向のヘラ磨き。	1/6残存。内黒土器。
11-3 -	土-坏	A期 Ab層	(12.1) 4.1 (7.1)	底部から大きく外反し立ち上がり、緩やかに内湾する。器厚は厚手である。	口縁部、体部横ナデ整形。底部、体部下端ヘラ削り。	1/6弱残存。体部の大半に油塗付着。
11-4 -	土-甕	A期	- (3.4) 7.0	器台部は立ちぎみに底部に取り付く。	器面の磨滅著しく、詳細は不明。	器台部のみ残存。
11-5 -	土-甕	A期 Ab層	- (2.8) 8.8	器台部は著しく外反する。	底部、器台部横ナデ。器台部の接合が丁寧である。	器台部のみ残存。転用灯明皿。内面に多くの油塗付着。
11-6 -	土-甕	A期 Ab層	(11.7) (4.6) -	口縁部、頸部はほぼ直立しながら「コ」字状を呈する。口縁部の径は短く、3条の沈線あり。	口縁部ナデ、胴部内面は横方向ヘラ削り後ナデ。外面横・左方向のヘラ削り。頸部にもヘラ状工具の圧痕あり。	口縁部1/6弱残存。
11-7 20	土-壺	B期 風土	(10.7) (6.8) -	胴部に最大径(11.6cm)がある。口縁部は僅かに「1」字状で、外反して立ち上がる。背部、半周程度に沈線あり。	粘土紐巻き上げ後、内面はナデ。外面の胴部及び背面に横方向のヘラ削り。	口縁部~胴部1/2残存。
11-8 -	土-甕	A期 Ab層	(13.0) (4.1) -	口縁部、頸部は内湾しながら「コ」字状を呈する。口唇部に1条沈線あり。	口縁部内面横ナデ、外面指頭圧後横ナデ。局部的に胴部ヘラ削り。胴部内面指頭によるナデ。外面はヘラ削り。	口縁部1/6残存。2次的に火を受けている。粘土紐痕あり。
11-9 -	土-甕	A期 Ab層	(18.5) (4.8) -	口縁部「く」字状に外反する。肩部はあまり張らない。	口縁部内面ナデ、外面上半横ナデ。下半ヘラナデ。胴部に横方向のヘラ削り。粘土紐接合痕あり。	口縁部1/3弱残存。
11-10 -	土-甕	A期 Ab層	(17.0) (6.5) -	口縁部緩やかに外反する。肩部はあまり張らない。口唇部外面に1条沈線あり。	口縁部外面上反横ナデ、下半指圧。胴部上半横方向のヘラ削り。粘土紐接合痕あり。	口縁部1/6強残存。
11-11 -	土-甕	A期 Ab層	(19.2) (5.5) -	口縁部、頸部はほぼ直立しながら「コ」字状を呈する。口唇部外面に2条の沈線あり。	口縁部内面はナデ、外面上半は指圧。下半はヘラナデ。胴部横方向の手持ちヘラ削り。	口縁部1/4弱残存。

第3表 出土遺物一覧表(2)

図面 国版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
11-12 20	類A-坏	A期 Ab層	(120) 3.5 (5.9)	底部から直線的に立ち上がり、緩やかに内湾する。口径部外側に固く。	内外面共にロクロによるナデ。口径部は強く外反する。底部外縁軽いナデあり。底部回転糸切り。	1/3残存。口径部に自然軸付着。新久1式期。Ⅱ群。
11-13 20	類B-坏	B期 Ab層	128 4.4 5.5	底部から直線的に立ち上がり、体部中位の稜を経て「>」状に外傾する。底部は体部より薄い。	内外面共にロクロによるナデ。体部下端内側への押さえが強い。底部外縁にナデあり。粘土継接合痕あり。	2/3弱残存。Ⅲ群。
11-14 -	類A-坏	A期 Ab層	121.5 4.4 5.5	底部から直線的に立ち上がり、緩やかに内湾し、口径部下端の稜を中心にやや外反する。底部中央肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。底部外縁横ナデ。外面ロクロ痕顕著。底部回転糸切り。	1/4弱残存。G5壺式期。Ⅲ群。
11-15 -	類A-坏	B期 Ab層	(138) 4.9 (7.0)	底部から緩やかに内湾し、口径部やや外反する。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。	1/5残存。Ⅳ群。
11-16 -	類A-坏	A期 Ab層	(118) 4.1 (4.4)	底部から直線的に立ち上がり、体部下端の稜にかけて緩やかに外傾し、さらに口径部まで緩やかに外傾する。	内外面共にロクロによるナデ。体部の下部、外側への押さえが強い。ロクロ痕顕著。底部回転糸切り。	1/6強残存。糸切り時、糸の挿入を2度失敗している。G5壺式期。Ⅲ群。
11-17 -	類A-坏	A期 Ab層	130 5.4 5.4	底部から直線的に立ち上がり、体部下端から緩やかに内湾し、口径部で外反する。体部下端肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。体部外面上半ロクロ痕顕著。口径部ナデによる粘土留りあり。底部回転糸切り。	1/5弱残存。口径部に自然軸付着。G25壺式期。Ⅱ群。
11-18 20	類A-坏	A期 Ab層	122 4.0 6.8	底部から口径部にかけて直線的に外傾している。底部は中央に比して薄い。	内外面共にロクロによるナデ。体部外面上半ロクロ痕顕著。粘土継接合痕あり。底部回転糸切り。	ほぼ定形。口径部に自然軸付着。Ⅰ群。
11-19 20	類A-坏	A期 復甦土内 Ab層	130 3.9 6.8	底部から大きく外反して立ち上がり、体部下端から緩やかに内湾する。口径部断面は尖りぎみ。底部は体部より肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。念入りな造りである。体部下端唇部にヘラナデ又は指ナデ。底部回転糸切り。	口径部少し欠損あるもほぼ定形。自然軸付着。前内出様式。Ⅰ群。
11-20 20	類A-坏	A期 Ab層	(140) 4.4 5.5	底部から緩やかに内湾して立ち上がる。体部中位に軽い稜あり。	内外面共にロクロによるナデ。口径部内側に軽い押さえあり。粘土継接合痕あり。底部回転糸切り。	1/3残存。Ⅲ群。
12-1 -	類A-坏	A期 Ab層	(139) 3.5 5.7	底部から緩やかに外傾し、口径部でやや外反する。体部下端は肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。棒状の圧痕あり。粘土継接合痕、糸の圧痕あり。底部回転糸切り。	口径部へ体部1/5残存。G25壺式期。Ⅱ群。
12-2 20	類A-坏	A期 Ab層	11.9 4.0 5.3	底部から体部中位の稜を経て、「>」字状にやや内湾しながら口径部で外反する。	内外面共にロクロによるナデ。粘土継接合痕あり。下端に糸の圧痕あり。底部回転糸切り。	定形。Ⅲ群。
12-3 20	類A-坏	B期 Ab層	(149) 4.95 (5.4)	底部から体部下端にかけて著しく内湾し、口径部にかけては緩やかに内湾しながら外反する。	内外面共にロクロによるナデ。口径部は外側へ押さえ強い。ロクロ痕顕著。糸の圧痕あり。底部回転糸切り。	1/2残存。Ⅲ群。

第4表 出土遺物一覧表(3)

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
12-4 20	須A-坏	B期 A b層	138 49 (7.0)	底部より体部の2条の線を經て緩やかに外傾し、口唇部で外反する。体部下端は底部、口縁部よりかなり肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。	3/4残存。局部的にスス付着。Ⅱ群。
12-5 -	須A-坏	A期 A b層	(14.7) 59 (5.9)	体部下端やや外傾し、緩やかに内湾しながら口縁部でやや外反する。底部中央の器厚非常に薄い。	内外面共にロクロによるナデ。口縁部下端外面、内側への強い押さえ(沈線)あり。底部回転糸切り。	1/4弱残存。口唇部に自然釉付着。口縁部に焼成しきらない粘土薄く付着。Ⅲ群。
12-6 -	須A-坏	A期 A b層	(14.8) 54 6.1	体部下端外湾し、緩やかに内湾しながら口唇部でやや外反する。	内外面共にロクロによるナデ。体部下端外面、内側への押さえ強い。底部外縁局部的にヘラナデ。底部回転糸切り。	1/2弱残存。内面、火を受けており、2~5mm単位で剥離している。Ⅲ群。
12-7 -	須B-坏	A期 A b層	(12.9) 40 (5.7)	底部から緩やかに内湾し、口唇部でやや外反する。底部中央は特に肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。口縁部外面、内側への強い押さえあり。ナデによる2条の沈線あり。底部回転糸切り。	1/4強残存。底部内面に不明墨書文字あり。新久I式期。Ⅱ群。
12-8 20	須A-坏	A期 I区 A b層	(16.0) 5.1 6.4	体部下端外湾して立ち上がり、内湾しながら口唇部でやや外反する。底部は体部より非常に肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。口縁部に粘土粒痕あり。底部回転糸切り。	1/4残存。Ⅲ群。
12-9 -	須A-坏	A期 A b層	(13.7) 4.7 5.6	底部から直線的に立ち上がり、緩やかに内湾しながら口唇部でやや外反する。	内外面共にロクロによるナデ。外面ロクロ痕顕著。底部外面釉状圧痕、粘土粒接合痕、糸の圧痕あり。底部回転糸切り。	1/4強残存。外面鉄分付着。Ⅲ群。
12-10 -	須A-坏	B期 A b層	- (1.0) 6.9	破片のため、詳細不明。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。	底部及び体部破片。体部下端に「詰?」の墨書文字あり。局部的に鉄分付着。
12-11 -	須A-坏	B期 II区 A b層	- (2.1) 6.1	破片のため、詳細不明。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。	底部及び体部破片。体部下端に不明墨書文字あり。
12-12 20	須A-皿	A期 A b層	13.0 2.7 5.5	底部から体部中位の軽い線を經て「く」字状に緩やかに外傾し、口縁部でやや外反する。口唇部断面丸く、器厚はほぼ均一。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。	1/3残存。G5窯式期。Ⅱ群。
12-13 20	須A-皿	A期 A b層	(13.4) 2.1 (6.2)	底部からほぼ直線的に外傾し、口唇部で外反する。高台が肥厚な底部外縁に付されている。	内外面共にロクロによるナデ。口唇部内面、外側への押さえが強い。高台部内側の接合粗雑。	1/4残存。Ⅲ群。高台高0.65cm
12-14 -	須A-塊	A期 I区 A b層	- (3.2) (7.6)	破片のため、詳細不明。「く」字状に直線的に開く高台が付されている。台底の断面は尖りぎみ。	内外面共にロクロによる念入りなナデ。付け高台。	底部1/5弱残存。転用碗。内面、つるつる状の使用痕あり。Ⅲ群。
12-15 21	須A-皿	A期 I区 A b層	15.8 6.9 6.6	底部から緩やかに内湾し、体部中位の線を經て口唇部でやや外反する。薄手である。	内外面共にロクロによるナデ。付け高台。接合粗雑。体部外面中位に1条強い押さえあり。	1/3強残存。Ⅲ群。高台高0.8cm
12-16 21	須A-皿	B期 II区 A期層	(16.6) 7.2 6.8	底部から大きく内湾し、口縁部でやや外反して開く。高台は根元から直線的に付き、外側に台状に開く。体部の器厚は薄い。	内外面共にロクロによるナデ。体部上半のロクロ痕顕著。口縁部、内側への押さえが強い。付け高台。	1/4弱残存。Ⅲ群。高台高0.6cm

第5表 出土遺物一覧表(4)

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考
12-17 -	須A-環	A期 Ab層	(14.6) (5.2) 7.5	底部から緩やかに内湾し、口縁部でやや外反する。高台は根元から直線的に付き、外側に台状に開く。底部中央は特に肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。高台部は念入りな接合による。	1/3割残存。内面、直径2~5mm単位で剥離している。焼成あり。G5窯式期。Ⅱ群。高台高0.75cm
12-18 21	須A-碗	A期 Ab層	(16.8) 7.3 (6.9)	底部から直線的に立ち上がり、緩やかに外傾し、口唇部でやや外反する。体部下端に短い高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。外面ロクロ痕顕著。底部の内側への押さえ特に強い。	1/3残存。高台部一引き出し。G25窯式期。Ⅲ群。高台高0.8cm
12-19 21	須A-壺	A期	- (12.8) 8.6	底部から緩やかに内湾する。短い台状の高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。付け高台。胴部外面ヘラナデ。	胴部~底部2/5残存。高台高0.7cm
12-20 -	須A-鉢	A期 Ab層	(24.6) (11.6) -	底部から緩やかに内湾し、口縁部で大きく内湾する。口縁部に沈線が1条ある。	内外面共にロクロによるナデ。口唇部、上に若干つまみあげている。	胴部1/3強残存。
13-1 -	須A-甕	A期 Ab層	- (10.3) 14.6	底部から緩やかに外傾する。短い台状の高台を付す。	胴部内面横ナデ、外面ヘラナデ。付け高台。	底部のみ1/3残存。底部内面に自然輪付着。高台高1.8cm
13-2 -	灰軸-環	A期 I区 Ab層	(11.6) 3.9 6.0	底部から体部下端と上半の境を経て、口唇部やや外反する。ややふんばりぎみに内湾する高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。	体部1/10、底部3/4残存。K90窯式期。Ⅳ群。高台高0.8cm
13-3 -	灰軸-皿	A期 I区 Ab層	(14.0) 3.1 (5.8)	底部から緩やかに内湾し、口縁部で外反する。やや内湾する短い高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。	1/4強残存。体部内面と外面上半部に灰軸付着。K90窯式期。Ⅳ群。高台高0.75cm
13-4 21	灰軸-皿	A期 I区 Ab層	(14.4) 3.0 (7.4)	底部からはほぼ直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。やや外傾する短い高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。口唇部への外側の押さえ強い。	1/2残存。内面のみ灰軸付着。K5窯式期。Ⅳ群。
13-5 -	灰軸-手付加蓋	A期 Ab層	- (8.3) (8.2)	徳利形を呈し、底部から内傾ぎみに立ち上がり、体部下端の境を経て大きく内湾する。全体に肥厚な造り。扁平な取手を付す。	内外面共にロクロによるナデ。底部回転糸切り。周辺ヘラナデ。	2/5残存。K90窯式期。Ⅳ群。

SD70溝跡 鏡瓦 一 覧

図面 図版	出土 位置	内 区				外 区				全長	備 考		
		直径	中房径 葦子数	弁区径 弁 輪	弁数	幅	内 縁 幅 文様	外 縁 幅 高 文様					
10-4 19	B期	-	-	-	(2)	(1.5)	-	-	1.5	1.0	-	(3.5)	灰色。粗砂粒と小礫(直径1~4mm)を多く含む。文様部分裏面に男瓦部との接合痕あり(印ろう付け)。
10-5 19	硬質土内 1層 Aa層	-	-	-	(2)	2.8	0.8	-	2	1.1	-	(4.9)	灰色。粗砂粒を多く含む。文様部分裏面に男瓦部との接合痕あり。
10-6 -	硬質土内 2層	-	-	-	(1)	2.1	-	-	-	-	-	-	断面淡灰色、内外面灰色。粗砂粒を多く含む。文様部分裏面に布目痕あり。
13-6 21	A期 Ab層	-	-	-	(2)	1.5	0.8	-	0.7	0.5	-	(1.3)	断面灰色、文様面明褐色、文様裏面黒灰色。砂粒と海綿骨針を多く含む。文様部分裏面に男瓦部との接合痕あり(印ろう付け)。

第6表 出土遺物一覧表(5)

SD70溝跡 宇瓦 一 覧														
図 面 図 版	出 土 位 置	上弦弧幅 下弦弧幅 厚 深	厚 深	内 区		外 区				脇 区		文 様 深 さ	全 長	備 考
				厚 深	文 様	上		下		幅	文 様			
						厚 深	文 様	厚 深	文 様					
10-7 19	A 期 埋 土 A a 層	- (9.5) -	-	5.1	-	0.4	-	0.4	-	4.7	-	0.2	(10.4)	断面灰色、内面黒色、外面淡灰色。 粗砂粒と小礫を多く含む。
10-8 19	上面硬質 土層 A a 層	(19.7) 24.5 (3.1)	4.1	27	KK	0.8	a	0.6	a	4.0	a	0.1	22.7	灰色。粗砂粒と小礫(直径1~5mm)を 含む。高温焼成。段割。
13-7 21	A 期 埋 土	- -	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	0.1	-	灰色。粗砂粒と小礫(直径1~5mm)を 多く含む。
SD70溝跡 男 瓦 一 覧														
図 面 図 版	出 土 位 置	狭帯 広端 全長	厚 深	成・整形の特徴									備 考	
				凹 面			凸 面			端 面				
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴					
10-9 28	A 期 埋 土	- (6.3)	1.4	-	20×20	-	-	ナデ。	-	-	-	-	-	凸面に押印「埴」。灰白 色。粗砂粒と海綿骨針を 若干含む。
13-8 21	A 期 II 区 A b 層	- (18.5) (26.5)	1.0	-	18×21	布合わせ目あ り。	縄 目	縄目叩き後、 広端部上はほぼ 平行なヘラ削り。	広端ナデ、左 右側端ヘラ削り。	広端面ワラ状圧痕と布目 痕の本端あり。火を受け ている。凹面、布目不規 則でしゝあり。				
13-9 22	A 期 II 区 A b 層	- (9.8) (24.6)	1.3	-	21×22	-	-	縦方向のナデ。 広端付近にヘラ 削り。圧痕 あり。	狭帯除く3端 をヘラ削り。	凹面にヘラ書き文字 「木」。火を受けている。 凸面中央部剥離している。				
13-10 -	A 期 A b 層	- (7.7)	1.4	-	-	ヘラ削り。	縄 目 9 本	広端に平行な 縄目叩き後、 縦方向のヘラ ナデ。	右側端にヘラ 削り及びナデ。	凹面2~2.5cm幅の縦方向 のナデ。				
13-11 28	A 期 A b 層	- (7.3)	2.0	-	25×26 磨り消し	-	-	ナデ。	右側端ヘラ削り。	凸面にヘラ書き文字 「山」。				
13-12 -	A 期 A b 層	- (11.3) (9.2)	1.1	粘土紐 (約2.5~ 3cm幅の 横紐)	20×21	広端部ヘラ削り。	-	縦方向のヘラ ナデ。	広端ヘラ削り、 右側端ヘラ削り 及びナデ。	右広端隅切り。凹面に伸 張圧痕あり。				
14-1 22	A 期 I 区 A b 層	- (10.7) (27.8)	1.4	粘土紐 8 本 (約3~ 3.5cm幅 の横紐)	24×22	広、右側端部 ヘラ削り。	縄 目	縄目叩き後広 端部に斜め横 方向のヘラ削り。 局部的に 縦 方 向 の ナ デ。	広端ヘラナデ。 左右側端に糸 切り痕あり。	円筒半截糸切り分割か?				
14-2 -	A 期 II 区 A b 層	- (8.8)	1.7	粘土紐	33×34	布合わせ目あ り。ヘラ削り。	縄 目	縄目叩き後横 方向のヘラ削り。	左右側端ヘラ 削り及びナデ。	内外面は赤味がかった灰 白色。粗砂粒と小礫を多 く含む。				

第7表 出土遺物一覧表(6)

SD70溝跡		女 瓦 一 覧		成・整形の特徴					備 考	
図 面 図 版	出 土 位 置	狭端 広端 全長	厚 さ	凹 面		凸 面		端 面		
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴		特 徴
10-10 -	硬質土内 1層 Aa層	(10.5) - (15.1)	2.6	-	19×23	ヘラ削り。	正格子	比較的シャープな正格子叩き。	広端縁ヘラ削り。	砂粒、小塵、雲母、海綿骨針を多く含む。
10-11 19-28	硬質土内 1層 Aa層	(10.3) - (22.5)	2.2	粘土板	20×19	ヘラ削り。	正格子	比較的シャープな正格子叩き。	狭端、右側端縁ヘラ削り。	凹面に糸切り痕あり。ヘラ書き文字「父」。右側端面の整形粗雑。
10-12 -	硬質土内 1層 Aa層	- - (6.9)	1.9	-	20×18	-	押型	縦方向のケズリ。文字の叩き。	ヘラ削り。	叩き文字「花」。
10-13 28	硬質土内 2層 Aa層	(13.5) - (7.8)	2.2	-	15×18	-	正格子	横方向のナアの後、正格子叩き。	-	凸面にヘラ書き文字「男」。
10-14 -	A期 II区 Ab層	- - (10.0)	2.1	-	23×25	-	斜格子	-	-	凹面にヘラ書き文字(不明)。
10-15 28	A期 Ab層	- - (6.5)	1.6	-	27×31	-	縄目 L8本	-	-	凹面にヘラ書き文字「ユ」。
14-3 -	A期 Ab層	(6.5) - (7.4)	1.7	-	21×20	ヘラ削り(現存部)。	縄目 L9本	-	狭端、左側端ヘラ削り及びナデ。	凹面端部、布目痕が一段下がった所にあり。周囲をヘラ削り。
14-4 -	B期 Ab層	- - (9.0)	2.0	-	-	磨り消し整形。	縄目 L12本 正格子	縄目叩き後正格子の叩き。	-	断面に糸切り痕を持つ3枚の粘土塊又は粘土痕あり。
14-5 28	A期 Ab層	- - (3.2)	1.9	-	-	ヘラ削り(現存部)。	正格子	-	-	凹面にヘラ書き文字(不明)。
14-6 -	C期 Ab層	- - (10.0)	1.9	-	-	ヘラ削り及びナデ。	斜格子	菱形に近い。	-	凹面に押印「父」。
14-7 -	A期 Ab層	- - (9.1) (13.3)	2.2	粘土柱 粘土塊	20×20	ヘラ削り(現存部)。	斜格子	-	広端、左側端ヘラ削り。	左側端縁から端面にかけて若干布目痕あり。凹面左側端付近に顕著な微塵あり。
14-8 28	A期 I期 Ab層	- - (8.2)	2.2	-	28×22	ヘラ削り(現存部)。	縄目 8本	側端に平行。	左側端ナデ。	凹面にヘラ書き文字「中」。
14-9 21	A期 Ab層	- - (9.6)	1.8	-	21×19	ヘラ削り(現存部)。	正格子	丁寧でシャープな正格子叩き。	左側端ナデ。	いぶし焼き。
14-10 21	A期 II期 Ab層	- - (5.4)	2.1	-	24×25	左右両端ヘラ削り。局部的に磨り消し。	縄目 L11本	縄目叩き後左右側端ヘラ削り。	左右両端ヘラ削り及びナデ。	塊瓦。
15-1 22	硬質土内 1層 硬質面上 Aa・Ab層	- - (8.7) (25.8)	1.6	-	24×21	ヘラ削り(現存部)。	正格子	正格子の叩き後、縦方向のナデ。	広端、左側端ヘラ削り及びナデ。	凹面に斜方向のしわ多し。

第8表 出土遺物一覧表(7)

図面 図版	出土 位置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備 考
				凹 面			凸 面		端 面	
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴	
15-2 22	A 期 II 区 A b 層	(17.6) — (18.5)	2.6	-	14×17	右端に幅狭な ヘラ削り(現 存部)。	縄 目 L 9 本	約5cm幅で不 連続な叩き。	狭端ヘラ削り。 右側端ヘラ削 り及びナデ。	2次的に火を受けてい る。直径5cm単位で剥離 している。
15-3 22	A・B期 A b 層	(13.8) — (15.0)	2.0	-	30×28	布縞目あり。	縄 目 L 7 本	約5cm幅で不 連続な叩き。	狭端ヘラ削り 及びナデ。右側 端ヘラ削り。	内外面共に灰色。砂粒を 多く含む。
SD70溝跡 博 一 覧										
図面 図版	出土 位置	長辺 短辺 厚さ	素 材	成・整形の特徴			備 考			
				上 面	下 面	側 面				
11-1 19	A b 層 硬質土内 2 層	(18.8) 15.4 6.1	-	弧状のナデにより調整。	弧状のナデにより調整。	縄目叩きの後、ナデに よる整形。	灰色で硬質。			
SD70溝跡 石 製 品 一 覧										
図面 図版	種 別	出 土 位 置	寸 法		備 考					
15-4 23	砥 石	埋 土	長辺 (4.4) 短辺 3.7 厚さ 4.0		砥面にカキキズ数条あり。炭化物の付着が多い。					
SD70溝跡 金 属 製 品 一 覧										
図面 図版	種 別	出 土 位 置	寸 法		備 考					
15-5 23	刀 子	A 期 埋 土	長さ (9.8) 幅 1.0 厚さ 0.6		全体にサビが著しく、切先等の形状は不明。柄の長さに対し、刃部が短いことから、 碩き直しが頻繁であった可能性が高い。					
15-6 23	刀 子	A 期	長さ (9.4) 幅 0.9 厚さ 0.55		切先は鋭く、鋭利に造られている。					
15-7 23	錠 前	A 期	長さ (16.4) 幅 0.6 厚さ 1.2		いわゆる海老錠のシャフト部分であり、端部が欠損している。					
15-8 23	鉄 釘	A 期	長さ 3.6 幅 0.6 厚さ 0.45		楕円形を呈する。先端部は短く、飾り釘である。頭の幅 1.8cm					
15-9 23	鉄 釘	A 期	長さ (16.2) 幅 1.85 厚さ 0.8		大形の角釘である。					
15-10 23	鉄 鎌	埋 土	長さ (13.6) 鎌身部幅 (3.8) 茎部幅 0.6 基部厚 0.7		二又で丁寧な造りであるが、鎌端部がやや短い。					

SD71溝跡 土器 一 覧

国 面 国 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考
16-1 -	須-壺	埋 土	16.1 (5.3) -	胴部下端が緩やかに内湾し、口唇部ではつまみ出すように外反する。	ロクロによる整形。	小破片。
16-2 -	須-蓋	埋 土	(12.4) (2.9) -	宝珠形つまみを有する。天井部から段をなして直線的に口縁部に向かう。	内外面共にロクロ調整?	1/2残存。

SD71溝跡 鏡 瓦 一 覧

国 面 国 版	出 土 位 置	直 径	内 区			外 区			全 長	備 考			
			中房径 窓子数	弁 幅	弁 数	幅	内 縁 幅 文様	外 縁 幅 高 文様					
16-3 -	埋 土	-	-	-	(1)	-	-	1.7	0.4	-	(1.7)	男瓦部欠損。火を受けている。文様部分裏面布目痕あり。	
16-4 23	埋 土	(17.8)	(4.2)	-	(2)	2.3	1.0	-	1.3	0.5	-	(4.3)	全体的に自然軸付着。文様部分と男瓦部の接合痕あり(印ろう付け)。文様部分裏面は縄目印き。

SD71溝跡 宇 瓦 一 覧

国 面 国 版	出 土 位 置	上弦幅 下弦幅 弧 深	厚 さ	内 区		外 区		脇 区		文 様 深 さ	全 長	備 考		
				厚 さ	文 様	上 厚 さ	下 文 様	幅	文 様					
16-5 -	埋 土	-	(4.6)	(2.5)	K	-	-	1.5	-	2.2	a	0.15	(4.5)	段頸。灰色で、粗砂粒を多く含む。

SD71溝跡 女 瓦 一 覧

国 面 国 版	出 土 位 置	狭端 広端 全 長	厚 さ	成・整形の特徴						備 考				
				凹 面		凸 面		端 面						
		素 材		布 目		特 徴		叩 き		特 徴		特 徴		
16-6 -	埋 土	- (5.0)	1.8	-	-	28×23	-	-	縄 目 L 9 本	-	-	-	-	凹面に横骨文字「七」。
16-7 -	埋 土	- (9.7)	2.2	-	-	28×23	-	-	縄 目 L 9 本	-	-	-	-	凹面に横骨文字(不明)。火を受けている。
16-8 -	埋 土	- (10.2)	3.0	-	-	14×18	狭端部ヘラ削り。	-	正格子	丁寧なナアによって表面調整された後に正格子叩き。	狭端ヘラ削り及びナア。	-	-	粘土板3枚作り。
16-9 -	埋 土	- (15.8) (9.5)	2.0	-	-	26×25	右側端ヘラ削り。	-	斜格子	幅広でやや崩れた斜格子叩き。	広端ヘラ削り及びナア。右側端ヘラ削り。	-	-	内外面共に灰色。砂粒を多く含む。

第10表 出土遺物一覧表(9)

SI172住居跡 土器一覽										
図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考				
16-10 23	須一坏	埋土	(122) 4.8 (5.8)	底部下端でくびれて外湾し、 体部中位を中心に「く」字状に 内湾し、口縁部で外反する。体 部下端は肥厚し、底部は薄い。	内外面共にロクロによるナデ。 体部下端の押さえが強い。内 面ロクロ痕顕著。	1/4残存。Ⅲ群。				
16-11 23	須一坏	埋土	(124) 3.7 3.9	底部下端で外湾し、緩やかに に外傾して立ち上がる。体 部は薄く、底部はこれより 肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。 体部下端の押さえが強く、底部 外面に及ぶ。粘土継接合痕あり。 。底部回転糸切り。	灯明皿。1/2強残存。2次的に 火を受けている。口縁部内外面に 油煙付着。Ⅲ群。				
SI172住居跡 女瓦一覽										
図面 図版	出土 位置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴					備考	
				凹面			凸面			端面
				素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
16-12 -	カマド	(8.5) -	2.0	-	34×30	右側端ヘラ削り。	縄目 1.9本	-	広端、右側端 ヘラ削り。	焼土多く付着。
16-13 23	カマド内	(16.0) (16.5)	2.4	-	23×20	広端ヘラ削り。 糸切り痕あり。	正格子 9×11	正格子の叩き、 端まで均等に 力が入っていない。	広端、左側端 ヘラ削り。	ワラ状圧痕あり。
16-14 23	カマド	(13.0)	2.4	-	25×21	-	正格子	狭端に斜方向 に格子目叩き。	狭端にヘラ削り 及びナデ。	広端面にワラ状圧痕あり。 火を受けている。凹 面狭端部は整形粗雑で埃 がある。
SI174住居跡 土器一覽										
図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考				
17-1 -	土一坏	埋土	(114) 3.9 (5.5)	丸底の底部から緩やかに内 湾して立ち上がる。底部の 器厚は体部より薄い。	内面は横ナデ。外面は口縁部 横ナデ整形後指押し、体部下 端、底部は横ヘラ削り。粘土 継接合痕あり。	1/4弱残存。内外面共に直径2~ 5mm単位で相当剥離している。				
17-2 -	土一甕	-	(225) (6.0)	口縁部が「く」字状に外反 する。口唇部は内側に少し 突き出す。	内面は横ナデ整形。	口縁部1/8残存。				
17-3 -	須B一坏	埋土	(125) 3.9 (4.1)	体部下端外湾し、緩やかに 内湾しながら口縁部やや外 反する。口縁部は薄い。	内外面共にロクロによるナデ。 体部下端の押さえが強い。底 部回転糸切り。	1/4強残存。Ⅳ群。				
17-4 -	須一皿	-	(121) 2.3 (5.3)	底部から緩やかに外傾し、 口縁部で外反している。口 唇部内側に1条沈線あり。 底部は体部より肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。 口縁部を外側へ強く引き出 し、口唇部を内側につまみ上 げている。底部回転糸切り。	1/3残存。Ⅳ群。				
17-5 -	灰輪一皿	-	(18) (8.3)	破片のため、詳細不明。短 い高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。 体部ヘラ削り。	底部1/6残存。軸一底部内面に 付着。高台高0.4cm				

第11表 出土遺物一覧表 (10)

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
17-6 -	須-坏	-	- (123) 4.3	小さな底部から体部にかけて鈍角で、縦やかに外傾する。	内外面共にロクロによるナデ。体部下端に糸抜き痕あり。底部回転糸切り。	底部のみ残存。
17-7 23	須-坏	埋土	(132) 5.3 6.5	底部からやや内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。立ちどめの短い高台を付す。底部は体部より薄い。	内外面共にロクロによるナデ。口縁部の押さえ強い。体部下端へラ削り後、付け高台。	1/2強残存。IV群。高台高0.75cm

SI174住居跡 男 瓦 一 覧

図面 図版	出土 位置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備考
				凹面			凸面		端部	
				素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
17-8 -	カマド内	- (7.6)	1.9	粘土紐	32×27	-	-	丹念なナデ調整。	右側端ナデ。	凸面に自然軸付着(全面)。凹面粘土紐接合痕、部分的に指置によるナデあり。

SI174住居跡 女 瓦 一 覧

図面 図版	出土 位置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備考
				凹面			凸面		端部	
				素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
17-9 -	カマド内	(10.4) (8.5)	2.3	-	18×18	広端、右側端へラ削り。	正格子	やや粗いナデ調整の後正格子叩き。	広端、左側端へラナデ。	内面灰色、外面黒灰色。粗砂粒を含む。高温焼成。
17-10 -	カマド内	(17.3) (17.1)	1.9	-	17×18	端部まで布目が覆っている。	縄目 L7本	-	広端へラ削り及びナデ。左側端ナデ。	内面灰色、外面明赤褐色。砂粒を多く含む。

SI186住居跡 土 器 一 覧

図面 図版	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
17-11 -	須-坏	床面直上	- (3.4) 6.6	破片のため、詳細不明。外側にふんばる短い高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。体部下端へラ削り。底部端に高台を付す。	底部のみ残存。
17-12 -	須-鉢	-	(21.4) (8.6)	底部から縦やかに内湾し、口縁部で大きく内湾する。	内外面共にロクロによるナデ。口唇部、上に若干つまみ上げている。	口縁部1/4弱残存。

SI186住居跡 女 瓦 一 覧

図面 図版	出土 位置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備考
				凹面			凸面		端部	
				素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
17-13 23	床面直上	(19.5) (17.8)	1.2	-	18×18	広端部へラ削り。糸切り痕あり。	斜格子	比較的連続している。	広端へラ削り及びナデ。右側端へラ削り。	凹面に押印(不明)。

第12表 出土遺物一覧表 (11)

SI192住居跡 土器 一 覧						
図面	種別	出土	口径	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考
図版	器形	位置	高さ 底径			
18-1 24	土-甕	カマド内	- (7.5) (6.6)	底部より胴部下端にほぼ垂直に立ち上がり、胴部上位に向かってやや内湾する。	-	体部上半と底部中央欠損。ヘラ状圧痕あり。底部に木炭痕残存。高台高0.95cm
18-2 24	須-坏	カマド内	11.8 3.3 4.1	体部が内湾しながら口縁部で外反する。体部は薄く、底部はこれより肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。体部下端と口縁部の押さえが強い。底部回転糸切り。	ほぼ完形。内外面共に2次的に火を受けてススが附着し、直径2~5mm単位に剥離している。Ⅲ群。
18-3 24	須-坏	床 面	12.3 3.7 (5.1)	底部から緩やかに外傾して立ち上がる。体部は薄く、底部はこれより肥厚する。	内外面共にロクロによるナデ。底部外縁ヘラナデ。ワラ状圧痕、粘土縁接合痕あり。底部回転糸切り。	3/4強残存。鉄分が附着している。Ⅲ群。
18-4 -	須-坏	カマド内	(11.2) 3.5 4.1	体部が内湾しながら口縁部で外反する。体部は薄いつくりである。	内外面共にロクロによるナデ。体部下端と口縁部の押さえが強い。ロクロ痕顕著。底部回転糸切り。	2/3弱残存。内外面共に2次的に火を受けてススが附着し、直径2~5mm単位に剥離している。Ⅲ群。
18-5 24	須-坏	カマド	(16.2) 7.0 (7.7)	体部はやや内湾し、口縁部はやや外反する。体部下端は肥厚し、底部はこれより薄い。高台は外側にふんばっている。	内外面共にロクロによるナデ。底部と高台部の接合は粗雑で、接合痕が顕著。粘土縁接合痕あり。	1/2弱残存。Ⅲ群。高台高1.6cm
18-6 24	灰釉-碗	カマド	(13.6) 4.2 (6.0)	体部中位の腹を中心に、「へ」字状に内湾し、内湾した高台を付す。	内外面共にロクロによるナデ。付高台の内外面横ナデ顕著。	1/2弱残存。釉一液け掛けにより、内外面上半部に附着。Ⅳ群。高台高0.7cm

SI192住居跡 男 瓦 一 覧

図面	出土	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備 考
				凹 面			凸 面			
				素材	布目	特 徴	叩き	特 徴	端 面 特 徴	
18-7 24	カマド内	(7.5) (15.4) 37.5	1.0	-	24×21	狭端面にしぼりの痕跡が認められる。	縄目	全面約4cm幅に横ナデ。特に広端の周囲強い。縄目若干残存。	狭端、右側端ナデあり。ヘラ削り。	1/2残存。凹面、狭端付近に布目のしわ多くあり。広端面にワラ状圧痕あり。
18-8 24	カマド内	- (22.6)	1.5	-	15×18	側端面の粘土がはみ出している。	縄目	横ヘラ削り及び短いヘラナデ。	狭端ナデ、左右側端ヘラナデ。	下半部と狭端付近欠損。凹面斜方向に布目のしわ多くあり。

SI192住居跡 女 瓦 一 覧

図面	出土	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備 考
				凹 面			凸 面			
				素材	布目	特 徴	叩き	特 徴	端 面 特 徴	
18-9 24	埋 土	- (27.0)	2.5	-	18×26	側面に斜方向の糸切り痕あり。左側端ヘラ削り。	正格子 18×7 縄目L	幅広くシャープな正格子叩き。	狭端、左側端にヘラ削り及びナデ。	鉄分、焼土付着。粘土板2枚重ね。凸面叩きの相痕顕著。
18-10 25	カマド内	13.4 (17.0)	2.5	-	21×26	右側端ナデ。	縄目 L10本	不定方向からの縄目叩き。	広端、左側端、右側端ヘラ削り。	上半部欠損。渠瓦。全面に自然釉が厚く付着し、広端は局部的に鉄分付着。

第13表 出土遺物一覧表 (12)

図面 図版	出土 位置	伏線 広さ 全長	厚さ	成・整形の特徴						備 考
				凹 面			凸 面		端 面	
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴	
19-1 25-28	カマド内	- 28.0 (28.9)	1.5	粘土紐	39×39	ヘラ削り。	縄 目 L 8本	中央部は側端にはば平行に、左右両端は「ハ」字形に叩き(約5cm幅で不連続)。	広端、左側端ヘラ削り及びナデ。右側端ヘラ削り。	2/3残存。凹面中央部にヘラ書き文字「大」。左側端の周縁糸のほぐれ顯著。整形時粘土の補充をしている部分あり。広端にワラ状圧痕が多い。下半部、火を受けている。
19-2 25-28	埋 土	25.0 (22.5) 39.5	1.8	-	20×24	側端に対し凹弧状に糸切り痕、左右に布目ぎ目あり。四端ヘラ削り。	縄 目 L 8本	側端にはば平行に叩き(1.5cm幅で不連続)。	広端ヘラ削り及びナデ。左側端ヘラ削り。	ほぼ完形。凹面にヘラ書き文字「子」。指頭圧痕あり。広端にワラ状圧痕あり。火を受けている。
20-1 26-28	床面上 (南西隅)	23.7 (28.0) 32.8	2.0	-	21×18	四端ヘラ削り。	縄 目 L 13本	側端に斜行に叩き(約5cm幅で不連続)。後端縁に軽いなデ。	狭端、広端、左右側端ヘラ削り及びナデ。	ほぼ完形。凹面に横書き文字、朱書き文字(不明)。
20-2 26	埋 土	- (21.5) 39.4	2.2	-	14×21	側端の斜方に糸切り痕、布合わせ目あり。ヘラ削り。	縄 目 L 8本	側端に平行に叩き(約5cm幅で不連続)。	広端ヘラ削り及びナデ。左側端ヘラ削り。	ほぼ完形。凹面にヘラ書き文字(不明)。広端にワラ状圧痕あり。後端凹面少々剥離している。凸面左上と右下に横状圧痕あり。火を受けている。

SI192住居跡 埴 一 覧

図面 図版	出土 位置	長辺 短辺 厚さ	素 材	成・整形の特徴			備 考
				上 面	下 面	側 面	
18-11 -	カマド内	(13.5) 16.2 6.2	-	全面にナデ。	全面にナデ。	全面にナデ。	やや黄色味を帯びる灰色。

SI194住居跡 土 器 一 覧

図面 図版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
21-1 27	灰袖一 手付短頸瓶	埋 土	- (9.9) 6.1	底部から緩やかに内湾し、頸部、口縁部で大きく外反する。片側に扁平な取手を付す。	内外面共にロクロによるナデ。体部上半から仕上げの横ナデ。取手の接合痕あり。底部回転糸切り。	頸部より上を欠損。袖一流し掛けにより、体部上半に付着。

SI194住居跡 女 瓦 一 覧														
図 面 図 版	出 土 位 置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備 考				
				凹 面		凸 面		端 面						
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴					
21-2 -	P-3内	- (14.2)	3.0	-	-	縦横割り消し。	斜格子	全面磨り整形。	広端ナダ。	凹面縄目の上板削り。				
21-3 27	P-3内	- (11.8) (12.0)	2.3	-	28×30 22×14	布合わせ日あり。	縄 目 L 6本	連続。	広端、右側端 へら削り。	凹面に粗い布目と細かい 布目の2通りあり。				
SK368土坑 土 器 一 覧														
図 面 図 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径	器形の特徴		成・整形の特徴		備 考						
21-4 27	須一坏	埋土	(13.5) 5.1 (5.0)	底部から緩やかに内湾し、 口縁部で大きく外反する。 短い高台を付す。		内外面共にロクロによるナダ。 底部未切り履し後付け高台。口 縁部は体部、底部に比して薄い。		1/3強残存。内外面いぶし焼き 状になっている。IV群。高台高 0.6cm						
SK393土坑 土 器 一 覧														
図 面 図 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径	器形の特徴		成・整形の特徴		備 考						
21-5 27	須一 短頸甕	埋土	(11.4) (13.4) -	頸部直線的に外傾し、口縁 部で大きく外反する。口唇 部尖りぎみに内傾する。肩 部は緩やかに内湾する。		内外面共にロクロによるナダ。 胴部と頸部の接合粗雑。		胴部上半1/2弱残存。						
遺構外 土 器 一 覧														
図 面 図 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径	器形の特徴		成・整形の特徴		備 考						
21-6 27	須一坏	表 採	(15.4) 4.7 (7.2)	底部から緩やかに内湾して 立ち上がり、口縁部で外反 する。		内外面共にロクロによるナダ。 底部回転糸切り。		1/2弱残存。火を受けて局部的 に胎土もろい。IV群。						
遺構外 宇 瓦 一 覧														
図 面 図 版	出 土 位 置	上弦幅 下弦幅 弧 深	厚 度	内 区 外 区				幅	文 様	全 長	備 考			
				厚 度	文 様	上 厚 度	下 厚 度					文 様		
21-8 27	表 土	- -	(5.6)	3.0	-	-	2.6	-	0.25	-	-	凸面縄目叩き (8本)。		
21-9 27	散 乱	- -	6.3	2.8	K	1.6	a	1.9	a	0.6	a	0.35	(16.0)	左側端へら削り。凸面縄目叩き (9 本)。縄目叩きは側面に平行している。

第15表 出土遺物一覧表 (14)

遺構外 男 瓦 一 覧										
図 面 版	出 土 位 置	狭端 広端 全長	厚 さ	成・整形の特徴						備 考
				凹 面			凸 面		端 面 特 徴	
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴		
21-12 28	黒褐色土	- -	1.5 (6.5)	-	-	-		-	-	凹面にヘラ書き文字「田」。
遺構外 女 瓦 一 覧										
図 面 版	出 土 位 置	狭端 広端 全長	厚 さ	成・整形の特徴						備 考
				凹 面			凸 面		端 面 特 徴	
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴		
21-10 -	黒褐色土	- -	2.8 (13.0)	-	20×19	糸切り痕あり。		斜格子	-	凸面に叩き文字「花」。 糸切り痕を持つ粘土塊の 様な粘土板の接合痕あり。
21-11 27	表土	- -	2.2 (7.8)	-	32×28	-	板目	-	-	
21-13 -	黒褐色土	- -	2.0 (8.0)	-	17×19	-	押型	-	-	凸面に押型「桶」(造字)。
21-14 28	掘乱	- -	1.8 (8.6)	-	39×35	-	縄目 13本	-	-	凹面に模骨文字「土」。
遺構外 土 製 品 一 覧										
図 面 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 高 底 径	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	備 考				
21-7 27	紡錘車	表土	(2.9) 1.3 (4.6)	台形を呈し、中央に軸穴が 穿孔されている。	全面へラ削り。	1/2弱残存。内外面淡褐色。断 面白っぽい淡褐色。粗砂粒を多 く混入する。				

Ⅵ 小 結

本調査区は僧・尼寺中間地点と言う重要な地域であり、また尼寺伽藍地東側に当たる。本項では調査の結果に基づいて、1. 尼寺伽藍地東辺区画溝の規模と変遷及び 2. SF1道路状遺構の形状についてまとめる。

1. 尼寺伽藍地東辺区画溝の規模と変遷

武蔵国分尼寺は昭和39年の金堂及び尼坊跡の発掘調査以来、平成4～7年までの確認調査を経て、金堂・尼坊・中門・東門と関連する遺構群の内容が明らかにされてきた。これらの施設を区画する伽藍地は素掘りの境界溝によって区画されている。溝の規模は、今回の調査成果等から幅2～5m、深さ1.5mを測り、伽藍地の規模は1町半(約160m)四方と推定される。また、尼寺が完成した時期については僧寺同様に、文献等の文字記録がないため明らかな時期は不明である。しかしながら出土遺物等から見て8世紀末には完成したものと考えられている。廃絶の時期も明らかではないが、12世紀代には造られていたとされる伝承鎌倉街道が、府中方面から北上して国分寺崖線を切り通し、伽藍地内を南北に縦断して通過していることから、12世紀代初頭には廃絶した可能性が高い。

この間に尼寺の建物群の何回かの建て替えや、規模の拡充・縮小等の変遷が想定される。今次調査では伽藍地東辺区画溝について、覆土の観察から古い順にC～A期の3段階に区分した(図面2模式図参照)。ここではその埋没過程を検証することにより区画溝の規模と変遷について述べたい。なお、検証の基準は次のとおりである。

1. 溝の覆土の性質(色調・粘性・締まりの程度)
2. 出土遺物の年代(特に土器)
3. 自然科学分析による溝の覆土の性質(第8図参照)

[C期]

色調は黒褐色～暗黄褐色土を主体とし1～2cm大のロームブロックを多く含み、壁際が比較的硬質で締まる。時期を判断する土器は出土していない。B期溝が大きく掘り込んでいるため底面の形状は明らかではない。pH値は5.5～5.6を示す。残存状況での規模は上面幅2.92～4.54m以上、底面幅2.35～2.48m、深さ0.82～1.44mである。断面形は逆台形を呈していたものと推定される。

[B期]

色調は黒褐色～暗黄褐色土を主体とし0.5～1mm大のローム粒を多く含み、底面付近はやや

粘質で比較的硬質に締まる。時期が判別できる土器は少量であるが出土した。須恵器環の形態からG25窯式期を主体として9世紀末から10世紀初頭の資料が中心である。A期溝が大きく掘り込んでいるため、上面の形状は明らかではない。pH値は5.4～5.5を示す。残存状況での規模は上面幅1.43～2.40m以上、底面幅0.34～1.18m、深さ1.24～1.74mである。断面形は箱形を呈していたものと推定される。

[A期]

色調は黒褐色土を主体とし、1～2cm大のロームブロックを多く含み、確認面・底面に硬質な部分が認められる。遺物は覆土の上層に最も多く出土し、下層には少ない(第9図参照)。やや古手の資料が混在するものの、須恵器環の形態からG5窯式期を主体として10世紀中葉から後半代の資料が中心である。pH値は5.3～5.4を示す。確認面での規模は上面幅3.63～5.04m、底面幅1.10～1.88m、深さ0.75～1.32mである。B期溝が半分以上埋没した段階で掘り直されたのであろうか、断面形は皿状を呈している。



第9図 SD70溝跡内出土土器 模式図

以上の検証結果と僧寺を区画する寺院地区画溝の変遷とを比較すると、溝覆土の埋没過程が3段階に区別されることや(概報25参照)、各段階での溝の形状が逆台形から箱形に掘り直され、最終的に浅い皿状の溝へと変遷していくことが共通している。B期溝が掘り直された時期が土器の年代から9世紀代に相当すると考えるならば、塔の再建が行われ、僧尼寺の整備・拡充が行われたと考えられている再建期の時期との整合性も認められよう。同様にA期溝から出土する土器の年代が10世紀中葉から後半代を中心としていることから、僧寺の衰退期に相当すると考えられる。さらにA期溝のpH値を詳細に観察すると、覆土下層の値は5.4～5.5を示しB期溝の値に近い。これに対して上層の値が他の溝の覆土値と比較して最も低い5.3～5.4であり、土器が最も集中している部分でもある。今回の分析結果ではpH値は自然環境の影響を受けることによってその値が減少する傾向にあることから、A期溝が埋没する後半段階では、溝の掘り直し等の整備は行われず、区画溝としての役割は完全に失われ、単なる窪地と化し、土器の廃棄場所として利用された可能性が指摘される。C期溝については時期を判別する資料が

ないことから、A・B期溝に先行する尼寺創建期の溝と判断した。

ただし、ここで述べたC～A期溝の変遷は武蔵国分二寺の変遷過程モデルをストレートに当てはめた結果である。尼寺自体の変遷過程は依然として不明な点も多い。第10図に示したように尼寺は伽藍地区画溝で四方を囲み、さらに中枢部施設を中門から延びる一本柱礎と扉に伴う内外二条の素掘り溝で囲む。中枢部区画施設塼と溝は2時期あり、この点では僧寺と同様である。また中門は当初棟門で後に基壇付きの八脚門に建て替えられていることが判明している。今後はこうした尼寺中枢部施設変遷の側から当該区画溝の変遷の意義を検証する必要があるだろう。



第10図 尼寺全体図

2. SF1道路状遺構の形状

本報告では、調査地区の位置と検出されたSD71・76・77・78・83・86溝の形状と方向制から判断して、これらの溝が一体となって国分寺市内で検出されているSF1道路状遺構の一部であると判断した。近年、市外においてその延長線上に検出される同種の形状を呈する道路状遺構の総称として「東山道武蔵路」という名称が定着しつつある。ちなみに「東山道武蔵路」とは、関東地方各地で発見・調査・研究が続けられている道路状遺構の中で、「幅12mで両側に側溝を有するほぼ直線の道路」という、最大公約数的な共通項を持ち、7世紀に整備された東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の7道の内、都から東北に向かう「東山道」が上野国において武蔵国の国府がある現在の府中市方面に向かうため、分岐して武蔵国に至り、さらに下野国に戻る往還路と考えられている道路の「仮称」である。その形状や構造には通過する地域の地形・環境・歴史的背景が各所で考慮されており、一概に統一的な概念規定を定義する

には至ってはいない。

本報告では意図的にこの名称を使用しなかった。それは、本報告があくまでも検出遺構のみでの観察であり検討した地域も国分寺市内に限ったため、他の地域事例との比較検証を行っておらず、ゆえに総称としての仮称である「東山道武蔵路」という名称を当該遺構に冠することができなかったからである。

ここでは国分寺市内における既往の調査成果から見た測量的方向制と本調査地区内における道路状遺構の構造について述べる。なお、年代については、道路面及び側溝内からの年代判別可能な遺物が出土していないことから特に触れない。

①測量的方向制（第11図参照）

国分寺市内で調査されたSF1道路状遺構の方向について福田信夫の計測がある（福田1997）。これによると市内におけるデータは以下のとおりである。なお、本調査地区は⑬地区である（標系は国家座標で表示、方向角も同じ、第Ⅲ区系である）。

1. 座標系

確認北端＝①地点（②地点の北約750m）

座標値未測定

調査北端＝②地点東側溝

X = -33124.0 Y = -32625.4

②地点西側溝

X = -33109.8 Y = -32636.2

調査南端＝⑭地点東側溝

X = -34789.3 Y = -32687.1

⑬地点西側溝

X = -34759.2 Y = -32698.8

確認延長距離①～⑭地点＝2416.4m

調査延長距離②～⑭地点＝1666.4m（東側溝）

2. 方向角

②～⑥地点（東溝）＝N 2° 23' 16" E

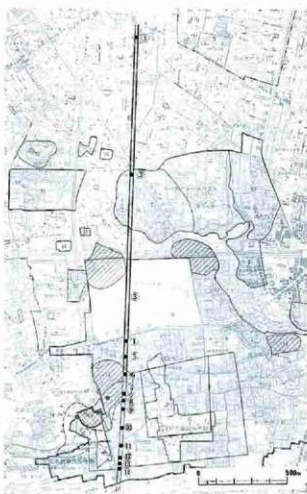
（計算区間距離1116m）

（西溝）＝N 2° 22' 40" E

（計算区間距離1134.48m）

⑥～⑭地点（東溝）＝N 1° 37' 02" E

（計算区間距離539.66m）



第11図 市内SF1道路状遺構 調査地点の位置

⑥～⑬地点(西溝) = $N1^{\circ} 44' 57'' E$ (計算区間距離516.89m)

3. 側溝心々距離

⑤地点 11.62m、11.85m

⑥地点 11.58m

⑬地点 11.63m、11.82m

従来の見解では、SF1道路状遺構の方向は、国府～国分寺間ではほぼ直線であると考えられていたことに対し、福田は上記の計測結果から、段丘崖上の⑥地点付近の位置が8m前後西にずれており、正確には直線上に乗らないことを指摘した。このことは⑥地点が比高差12mの段丘斜面の肩口に当たっていることから、道路築造に際しての測量誤差によるものと考えた。また、府中市調査の東芝エンジニアリング第2次(144次調査)地点と⑥地点間の距離735mでの方向角と、その南先で国府確認南端地点(350次調査)での方向角に40'程の振れがあることから道路築造の際の工事区間が700～800m程度であった可能性も指摘している。

②道路構造

本調査で検出されたSF1道路状遺構の基本的な道路構造について以下に示す。

1. 東・西側溝・・・SD83が東側溝、SD76が西側溝である。いずれも狭長の土坑が連続して溝状を呈しており、東西溝の心々の距離は約12mを測る。さらにSD78・86は一部攪乱によって滅失しているが、やや蛇行するものの

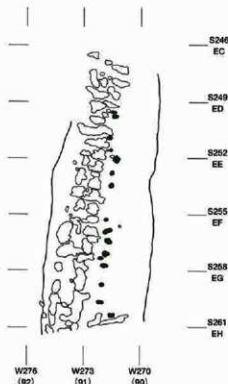
SD83と平行しており心々の距離は約7mを測る。

2. 道路面・・・SD71溝として把握した範囲である。側溝の内側から路面の中心付近にかけて窪んでおり、特にSD78・83の間で窪んだ部分が硬質面を形成している。

3. 波板状遺構・小穴・・・SD78・83の間の硬質面に特に顕著に検出された。模式図(第12図参照)に示したように、波板状遺構は道路方向にほぼ直交しており、小穴は波板状遺構の東側に道路方向と平行するように検出された。

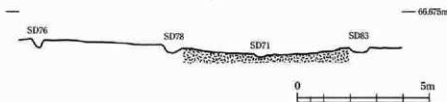
各溝の状況をもう少し詳細に観察してみる。SD76(西側溝)は上面幅約30～70cm、底面幅約20～40cm、深さ約50cm程度である。覆土は2層に分かれ、上層は0.5～2mm大のローム粒が混入する硬質で締まる黒褐色土。下層

は1～3cm大のロームブロックが混入する茶褐色～暗黄



褐色土が主体であり、人為的な埋め戻しの痕跡が認められる。SD83（東側溝）はほぼ同じ規模であるが上面の削平が著しい。これに対してSD78・86は上面幅約40～100cm、底面幅約20～50cm、深さ約20cm程度である。覆土は微小なローム粒を多量に含み、黒褐色土が主体である。特に上面は溝確認面全体で南北方向に帯状の硬質面が認められた。

溝自体の覆土の違いはSD76・83とSD78・86では明確であったがその新旧関係については遺構の上面が攪乱と削平が著しく堆積土の観察からは溝の関係を把握できなかった。断面模式図（第13図参照）を見るとSD76・78の間が比較的平坦で硬質面や波板状遺構・小穴が検出されていないのに対し、SD78・83の間が皿状に窪み、ここに硬質面や波板状遺構・小穴が検出されている。この構造上の変化が時間的な変化を示している可能性も指摘されよう。この変遷の過程を、便宜上SD76・83を第1期、SD78・86・83を第2期とし、第1期から第2期にかけての変化を概略すると、SD76（西側溝）が埋められ、新たにSD78・86が西側溝として掘削される。その結果路面（SD71）幅が12mから7mに狭くなり、路面整備の結果もしくは通行量の増大等の理由が想定されているが、硬質面や波板状の凹凸・小穴が顕著になる。さらにSD71が埋没する過程でSD78・86は新たな路面として利用されたのであろうか上面が硬質化する。また、SD74・75・85が道路状遺構を東西方向に切って掘削されているため、その段階で道路としての主な役割を終えていると考えられるが、時期を判別する遺物が無いため最終的な道路状遺構の終末の時期も不明である。



第13図 道路断面模式図 (A-A')

以上、SF1道路状遺構の方向制の問題点と本調査区の中でその状況から推測される道路状遺構の変遷を描いた。福田が指摘した、道路築造における測量技術の問題と作業単位の規模は、中央と「武蔵国」というマクロ単位の関係レベルではなく、道路通過地点で築造と整備・維持管理を担った地域と地域間の技術・経済関係を反映しているのかもしれない。また調査区内での道路構造の変遷を直載に他の調査地区での成果に敷衍されるべきものではない。今後の周辺地区の調査成果と総合して道路状遺構の実態を検証していかなければならない。

なお、本調査区の北方向約750mの武蔵野段丘面での③調査地区で南北約340mにわたって道路状遺構が検出されており、そこでは1～4期の道路面を設定している。本論で設定した1・2期との整合性は、1期については同時期と考えるが2期については、路面の構造や内容など相違点も多く時間的な関係は明らかではない。

Ⅶ 総 括

本書は昭和53年から54年にかけて発掘調査を行った(株)日東建設宅地造成の工事に伴う発掘調査報告書である。調査地は、武蔵国分僧寺と尼寺の中間地点にあたり、調査着手時は、当該地が尼寺伽藍地の東側区画溝の通過地点である事から、これを発見・調査が主目的とされていた。ところが、報告書作成の段階になり、調査時点では調査区を南北方向に縦断する溝・狭小な土坑・硬質部分と認識されていた遺構群が、実は同様な性格を持った遺構として府中市も含めた周辺地区の調査によって、ほぼ一直線上で検出されている事が明らかにされるにいたって、これが東西に側溝を有する道路遺構ではないかと想定されるに至った。これが現在では東山道「武蔵路」と称されることになる道路状遺構である。つまり調査時点では認識されなかったが、道路遺構研究の嚆矢となった調査である。

主な調査成果は、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居5軒、溝(尼寺伽藍地の東側区画溝を含む)4条、土坑14基、道路状遺構(東山道「武蔵路」)1条である。掘立柱建物は、東側区画溝の内側にあることから尼寺関連の施設であろうか。区画溝は堆積土の状況から3次期に分けられるとされた。これについては、僧寺区画溝も同様な傾向を示しており、土壌分析も同様の結果を示した。武蔵国分寺の変遷が創建期・再建期・衰退期に大別され、溝の様相もこれに対応することは興味深い。さらに東側区画溝の方向と道路遺構の方向はほぼ一致している。これは僧寺の金堂と講堂を結んだ主軸線が道路遺構とは異なっている事と対照的であり、僧寺は独自の測量基準によって設計されているのに対して、尼寺は道路に主軸線を合わせて設計されたものであろうと推測されている。

道路遺構について見ると、東西側溝は狭小な土坑が不連続的に一直線に並んでおり、心々間の距離は12mを測る。さらに幅4m程度の硬質面が内側にある。この硬質面の下からは波板状遺構と称される凹凸部分が検出された。これらの遺構はすべて「道路状遺構」を構成する要素であるが、先述したように調査時点ではこれらの遺構は全て独立した遺構として認識されていたため、現在要求されるような、「道路状遺構」として各遺構を有機的に関連付けた図面は作成されなかったことは残念であるが、本報告では関係する遺構図面については全て掲載した。

各地における東山道「武蔵路」の調査例は増加しているが、僧尼寺と関係する位置で検出された本調査区のように道路とそれに関係する遺跡群とが調査された例は、現在においても少ない。今後このような調査例が増え、道路状遺構とそれが通過する地域との関係性が明らかにされて行く事が必要であろう。本書がそうした研究の足がかりとなる事を期待して執筆する。

(調査団長 吉田 格)

参 考 文 献

- コ 国分寺市 1986 『国分寺市史 上巻』
- 国分寺市道跡調査団 1989 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XIV—昭和52～57年度 尼寺々城確認調査—』
国分寺市文化財調査報告 第29集
- 1996 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XXI—国分寺市公共下水道面整備西元地区
5・6号工事に伴う尼寺西・南方地区他の調査—』
- 国分寺市教育委員会 1996 『武蔵国分寺跡Ⅲ—平成6年度発掘調査概報—』国分寺市文化財調査報告
第43集
- 2002 『武蔵国分寺のはなし』
- ク (財)たましん地域文化財団 1997 『多摩のあゆみ』88号 特集 東山道武蔵路
2001 『多摩のあゆみ』103号 特集 国府・国分寺・東山道
- ク 東京国分寺ロータリークラブ 1996 『国分寺の歴史と自然』
- ニ 西国分寺地区道跡調査会 1996 『推定東山道武蔵路』 武蔵国分寺跡北西地区の道跡
1999 『武蔵国分寺跡北方地区 日影山遺跡・東山道武蔵路—西国分寺地区(旧国
鉄中央鉄道学園西側跡地)住宅市街地総合整備支援事業に伴う発掘調査報
告書—』
- フ 福田 信夫 1997 『武蔵国分寺と古代道路』 『古代文化』第49巻 第8号 (財)古代学協会

国分寺市遺跡調査会組織

(平成15年3月現在)

—役員及び監事—

会 長	坂詰 秀一	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	吉田 格	調査団長
理 事	大川 清	国士館大学名誉教授
理 事	星野 信夫	国分寺市長
理 事	大平 恵吾	国分寺市教育委員会委員長
理 事	野村 武郎	国分寺市教育委員会教育長
理 事	藤岡 恭助	元国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	星野 亮雅	元国分寺市社会教育委員
理 事	本多寅太郎	国分寺市文化財保護審議会副委員長
理 事	古関 豊	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	関口雄基臣	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	北原 進	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	石田 和彦	東京都教育庁生涯学習スポーツ部副参事(文化財担当)
理 事	平井 茂樹	国分寺市教育委員会教育部長
監 事	榎戸 潔	元国分寺市社会教育委員
監 事	岡崎 完樹	東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課理蔵文化財係長

—武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会—

委 員 長	吉田 格	(考 古)
委 員	坂詰 秀一	(考 古)
委 員	大川 清	(考 古)

—事 務 局—

事 務 局 長	伊藤 正蔵	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事 務 局 員	豊泉 文夫	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長
事 務 局 員	田中富美雄	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係員
事 務 局 員	松崎亜希子	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係員
事 務 局 員	樋井 亮	国分寺市遺跡調査会

—調 査 団—

調 査 団 長	吉田 格	元国分寺市文化財保護審議会委員
主任調査員	福田 信夫	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調 査 員	上村 昌男	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係員
調 査 員	上敷領 久	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係員
調 査 員	岩崎 玲子	国分寺市教育委員会嘱託遺跡調査員(平成14年12月31日退職)
調 査 員	木下さおり	国分寺市遺跡調査会
調 査 員	板倉 敏之	国分寺市遺跡調査会
調 査 員	吉田 好孝	日本富業史研究所
調 査 員	吉岡 秀範	日本富業史研究所

報告書抄録

ふりがな	むさしこくぶんじあとはくつちようさがいほう27							
書名	武蔵国分寺跡発掘調査概報27							
副書名	僧尼寺中間地点・(株)日東建設所有地に伴う調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	国分寺市遺跡調査団(団長 吉田 格) 渡辺 克彦 有吉 重藏 上飯領 久							
編集機関	国分寺市遺跡調査会							
所在地	〒185-8501 東京都国分寺市戸倉1丁目6-1 国分寺市教育委員会内 TEL. 042-325-0111							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
武蔵国分寺跡	東京都国分寺市 西元町・東元町	13-214	10・19	35度	139度	1978. 6. 1	1,269	住宅建設に伴う 事前調査
				41分	28分	～		
				09秒	12秒	1979. 4.15		
				～	～			
				35度	139度			
41分	28分							
				30秒	47秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
武蔵国分寺跡	寺院跡 集落跡 道路跡	奈良・ 平安時代 縄文 (中期)	歴史時代 掘立柱建物 住居 溝 土坑 道路状遺構 小穴	1棟 5軒 4条 14基 1条 30個	土師器・須恵器・灰輪陶器・ 瓦・埴 土製紡錘車・磁石 刀子・鋸前・鉄釘 鉄鏝	道路状遺構 (SP1) は通称 「東山道 武蔵 跡」を指す		
			縄文時代 土坑 小穴	4基 38個				

圖 面

図面3 SD71・74~76・78・85溝跡、SB52獨立柱建物跡 実測図

SD71・78



SD78

1. 暗黄褐色土 (ロームを多量に含みしり直し)
2. 黒褐色土 (ローム粒を含みしり直し)
3. 黒褐色土 (ローム粒・スコリアを少量含み粗い)

SD71

4. 黒褐色土 (ローム粒を含みしり直し)
5. 黒褐色土 (ローム粒を含みしり直しやや硬質)
6. 黒褐色土 (5層より硬質で粘性がある)
7. 暗黒褐色土 (6層より硬質で粘質)
8. 暗黒褐色土 (硬質で粘質)

B-B'



SD78

1. 黒褐色土 (ローム粒・スコリアを含み粗い)
2. 黒褐色土 (非常に硬質で粘質)

SD71

3. 黒褐色土 (ローム粒・スコリアを含み粗い)
4. 黒褐色土 (ローム粒を含みしり直し)
5. 黒褐色土 (4層より硬質で粘質)
6. 暗黒褐色土 (5層より硬質で粘質) 硬質土

7. 暗茶褐色土 (ロームブロックを多く含み硬質で粘質)
8. 暗茶褐色土 (硬質で粘質)
9. 暗黄褐色土 (ロームを多量に含む)
10. 暗黄褐色土 (ローム粒を多量に含む)

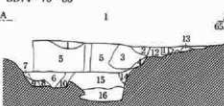
SD76



SD76

1. 黒褐色土 (ローム粒を含み粗いが硬質)
2. 暗黄褐色土 (ロームを多く含み粘質でしり直し)
3. 黄褐色土 (ロームブロックを含み軟質で粗い)
4. 暗黄褐色土 (ローム土・黒色土を含む)

SD74・75・85



SD85

1. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む)
2. 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック・暗茶褐色土が混入する)
3. 黒褐色土 (ローム粒をやや多く含む)
4. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む)
5. 暗褐色土 (ローム粒を多量に含む粗い)

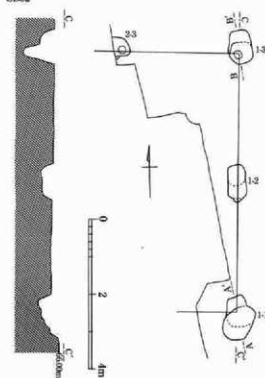
SD75

6. 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロックを多く含む)
7. 黒褐色土 (6層より粘質でローム粒をやや多く含む)
8. 黒褐色土 (6層よりローム粒・黒色土を多く含む)
9. 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロックを多量に含む)
10. 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロックを多量に含む)

SD74

11. 黒褐色土 (ローム粒を相当量含む)
12. 黒褐色土 (ローム粒を含みしり直し)
13. 黒褐色土 (ローム粒を含み粗い)
14. 暗黄褐色土 (ローム粒を多量に含む)
15. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロックを多量に含みしり直し)
16. 黄褐色土 (ロームブロック)

SB52



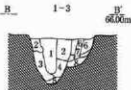
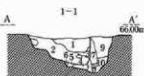
SB52 1-1

A層

1. 黒褐色土 (茶褐色土を含みしり直し硬質)
2. 黒褐色土 (ローム粒を少量含む)
3. 黒褐色土 (細く少量のローム粒を含む)

B層

4. 黒褐色土 (ローム粒を少量含む)
5. 黒褐色土 (ローム粒を少量含む)
6. 黒褐色土 (ローム粒を少量含みしり直し軟質)
7. 黒褐色土 (茶褐色土を含みしり直し軟質)
8. 黒褐色土 (ローム粒を含む)
9. 暗茶褐色土 (茶褐色土・ローム粒を多量に含む)
10. 茶褐色土 (ロームブロックを多量に含みしり直し)



SB52 1-3

A層

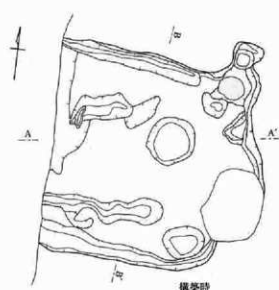
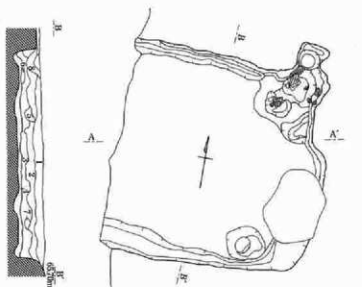
1. 黒褐色土 (細く軟質) 柱痕跡
2. 黒褐色土 (ローム粒を含み軟質)
3. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む)
4. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む)
5. 黒褐色土 (ロームブロックを含み軟質)

B層

6. 暗黄褐色土 (ローム・ロームブロックを含みしり直し)
7. 黒褐色土 (ロームブロックを含む)
8. 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)

0 1 2m

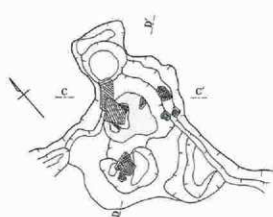
図面4 SI172住居跡 実測図



構築時



1. 黒褐色土 (多量のローム粒・焼土粒を含みやや軟質)
2. 黒褐色土 (1層より軟質)
3. 黒褐色土 (大粒・焼土粒を含む)
4. 黒褐色土 (粘床土-ロームブロックを多く含む)
5. 暗黄褐色土 (1-3層に比べてローム粒を多く含む)
6. 暗赤褐色土 (ロームを多量に含む)
7. 黒褐色土 (4層に近い)
8. 暗黄褐色土 (ローム粒を多量に含む)
9. 暗赤褐色土 (ローム粒をやや多く含む)
10. 暗黄褐色土 (8層に近い)
11. 黄褐色土 (ロームを多量に含む)
12. 黒褐色土 (3層に近くローム少ない)



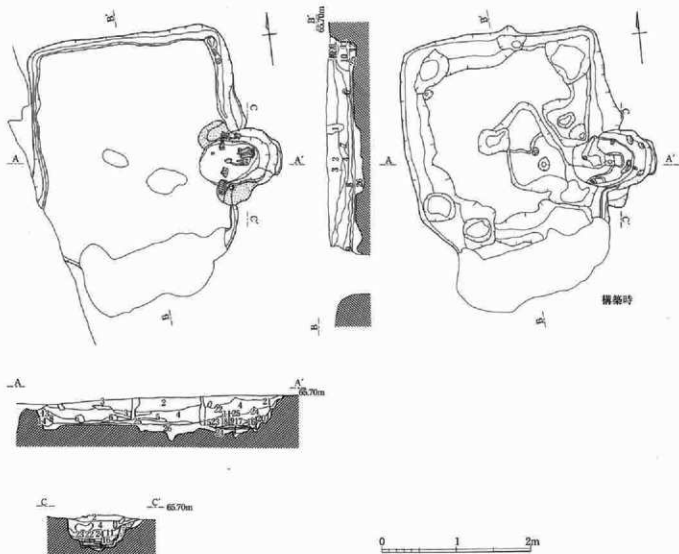
カマド

1. 黒褐色土 (焼土粒を多量に含む)
2. 黒褐色土 (焼土ブロックを含む)
3. 暗赤褐色土 (焼土・炭化物を多量に含む)
4. 暗黄褐色土 (ロームを多量に含む)
5. 黒褐色土 (1層に近くやや軟質)
6. 黒褐色土 (2層に近い)
7. 暗黄褐色土 (4層に近い)
8. 黒褐色土 (焼土粒をやや多量に含む)
9. 暗赤褐色土 (焼土・焼土ブロックを多量に含む)
10. 黒褐色土 (2層に近く焼土ブロックやや少量含む)
11. 暗赤褐色土 (焼土を多量に含む)
12. 赤褐色土 (焼土)
13. 暗黄褐色土 (11層とほぼ同一)
14. 黒褐色土
15. 暗黄褐色土



カマド

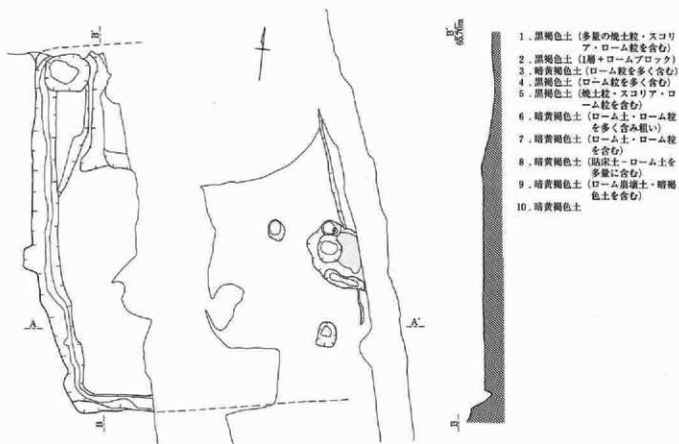
図面5 SI174住居跡 実測図



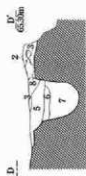
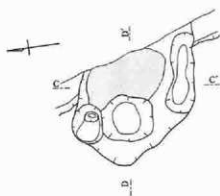
カマド

- | | | |
|----------------------------|--------------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒を多量に含む) | 10. 黒褐色土 (ローム土を含む) | 19. 黒褐色土 (焼土粒・ローム粒を含む) |
| 2. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 11. 黒褐色土 (ローム粒を含み軟質) | 20. 黒褐色土 (ローム粒を含む) |
| 3. 黒褐色土 (焼土・焼土粒を多量に含む) | 12. 暗黄褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 21. 黒褐色土 (ローム粒・スコリア粒を含む) |
| 4. 黒褐色土 | 13. 黄褐色土 (ローム土を多量に含む) | 22. 暗赤褐色土 (焼土) |
| 5. 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒を含む) | 14. 黒褐色土 (ローム粒・スコリア粒を含む) | 23. 暗赤褐色土 (火床) |
| 6. 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒を含み軟質で粗い) | 15. 黒褐色土 (ローム粒を含む) | 24. 黒褐色土 (ローム粒を含む) |
| 7. 黄褐色土 | 16. 黒褐色土 (焼土・焼土粒を多量に含む) | 25. 暗黄褐色土 (粘土土-ロームブロックを多く含む) |
| 8. 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒を含む) | 17. 黒褐色土 (ローム粒を含む) | 26. 黒褐色土 (粘土土-ローム粒を多く含む) |
| 9. 黒褐色土 | 18. 黒褐色土 (ロームを含む) | |

図面6 SI186住居跡 実測図



0 1 2m



カマド

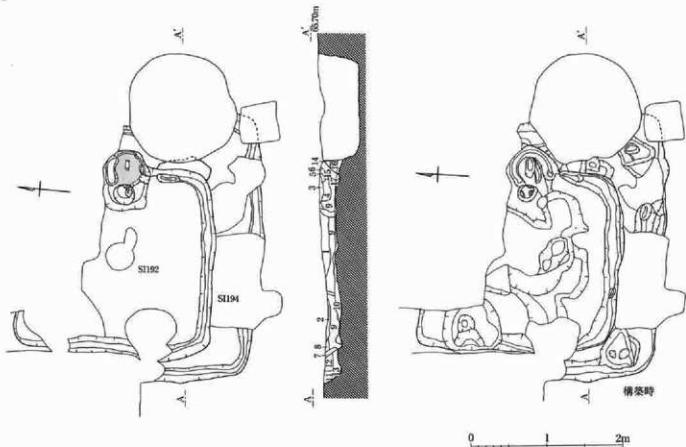
1. 黒褐色土
2. 赤褐色土 (焼土)
3. 黒褐色土 (炭化物を多く含む)
4. 赤褐色土 (焼土)
5. 赤褐色土 (ローム崩壊土・ロームブロックを多く含む)
6. 暗赤褐色土 (黒褐色土を含む)
7. 赤褐色土 (ローム崩壊土・若干の黒褐色土を含む)
8. 黒褐色土 (焼土粒を若干含む)
9. 暗赤褐色土 (焼土・灰・炭化物を多量に含む)



カマド

0 50cm

図面7 SI192・194住居跡 実測図



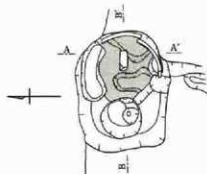
SI192

1. 黒褐色土 (焼土粒・ローム粒を多量に含み硬質)
2. 黒褐色土 (ローム粒を含みしまり良い)
3. 黒褐色土 (ローム粒を含みしまり良い)
4. 黒褐色土 (焼土粒・ローム粒を多量に含む)
5. 黒褐色土
6. 黒褐色土 (ローム粒を含む)

7. 黒褐色土 (ローム土を多く含みしまり良い)
8. 黒褐色土 (ローム土を含む)
9. 黒褐色土 (ローム粒・炭化物を若干含む軟質で粗い)
10. 暗黄褐色土 (貼り床)

SI194

11. 黒褐色土 (ローム土を含みバサバサしている)
12. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む)
13. 黒褐色土 (黒色土粒を多く含む硬質)
14. 黒褐色土
15. 黒褐色土
16. 暗赤褐色土
17. 暗赤褐色土



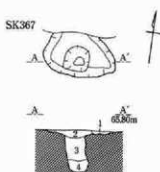
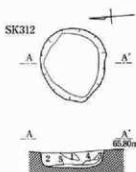
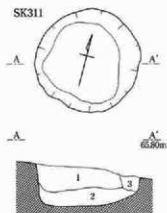
SI192カマド

1. 暗黄褐色土 (ローム崩壊土)
2. 黒褐色土 (多量の焼土粒・炭化粒を含み軟質で粗い)
3. 暗赤褐色土 (焼土・焼土粒を多量に含む)
4. 黒褐色土 (黄褐色土粒・焼土粒を多量に含む)
5. 黒褐色土 (黄褐色土粒・焼土粒を含む)
6. 暗赤褐色土 (焼土・焼土粒を多量に含む)
7. 黒褐色土 (多量の焼土粒・炭化粒を含み軟質で粗い)
8. 赤褐色土 (焼土ブロックを多量に含む一火床)
9. 黄褐色土 (ロームブロック)
10. 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
11. 暗黄褐色土 (ボロボロしたロームブロックを多量に含む)
12. 黒褐色土 (軟質でバサバサしている)
13. 黒褐色土 (ロームブロックを含む)
14. 黒褐色土 (ロームブロックを含む)
15. 暗黄褐色土 (ローム崩壊土)
16. 黒褐色土 (ロームブロックを含む)



SI192カマド





SK312

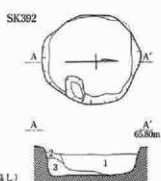
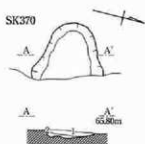
1. 黒褐色土 (ローム土を含む)
2. 暗茶褐色土 (ローム粒を含む軟質で粗い)
3. 黒褐色土 (ローム粒を少量含む)
4. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む)
5. 暗茶褐色土 (ローム粒を含むやや軟質)

SK367

1. 暗茶褐色土 (ローム土を含む軟質)
2. 黒褐色土 (粘質の暗茶褐色土ブロック・堆土粒を含む)
3. 暗茶褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
4. 暗茶褐色土

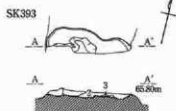
SK311

1. 黒褐色土 (小粒のロームブロックを含む軟質で粗い)
2. 黒褐色土 (1層よりロームブロックを多く含む)
3. 黒褐色土 (ローム粒を含む)



SK392

1. 暗茶褐色土 (ロームブロック・ローム粒を含む軟質でしまりなし)
2. 黒褐色土 (ローム粒を含む軟質でしまりよし)
3. 黒褐色土 (ローム粒を含む軟質)

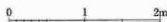


SK393

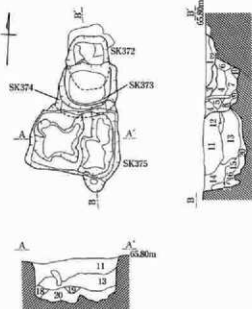
1. 黒褐色土 (しまり良くノコバ(中)している)
2. 暗茶褐色土 (ローム土を含む粘質でしまりよし)
3. 茶褐色土 (ローム土を多量に含む粘質でしまりよし)

SK370

1. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む硬質でしまりよし)
2. 黒褐色土 (粘質でしまり良く硬質)



SK372~375



SK372 1. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む硬質でしまりよし)

2. 暗茶褐色土 (黒色土ブロック・茶褐色土を含む軟質で粗い)

SK373 3. 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロックを含む)

SK374 4. 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロックを含む)

5. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロックを多量に含む)

6. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む)

7. 暗茶褐色土

8. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む)

9. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む)

10. 黄褐色土 (ローム土を多量に含む硬質でしまりよし)

SK375 11. 暗茶褐色土 (ローム土・ロームブロック・黒色土ブロックを含む)

12. 暗茶褐色土 (粘質でしまりよし)

13. 茶褐色土 (ロームブロック・スコリアを含む)

14. 暗茶褐色土 (ローム粒を含む粘質でしまりよし)

15. 暗茶褐色土 (13層より白っぽい)

16. 暗茶褐色土

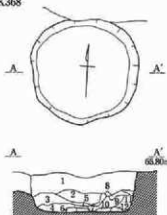
17. 暗茶褐色土

18. 暗茶褐色土 (ローム土を含む)

19. 暗茶褐色土

20. 暗茶褐色土 (ロームブロック・暗茶褐色土を多く含む)

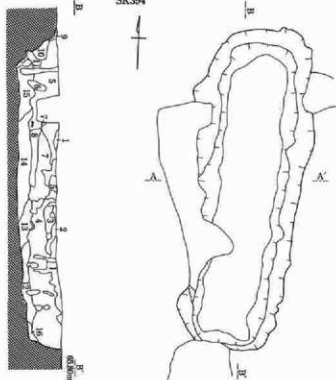
SK368



SK368

1. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロックを多量に含む軟質)
2. 暗茶褐色土 (1層よりロームが多い)
3. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む粘質)
4. 暗茶褐色土 (ロームを含み粘質でしまり良し)
5. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む)
6. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む粘質)
7. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロックを含む)
8. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む粘質)
9. 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロックを含む)
10. 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む)
11. 暗茶褐色土 (ロームを多く含む粘質でしまり良し)
12. 暗茶褐色土 (ロームを多く含む粘質でしまり良し)

SK394

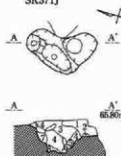


SK394

1. 黒褐色土 (軟質でしまりなし)
2. 暗茶褐色土 (ローム土を含む硬質でしまり良し)
3. 暗茶褐色土 (ローム土を含む硬質でしまり良し)
4. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含むしまり良し)
5. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む)
6. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含むしまり良し)
7. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む)
8. 暗茶褐色土 (ローム土を含む)
9. 暗茶褐色土 (ローム土・ローム粒を多く含むしまり良し)
10. 暗茶褐色土 (ローム土を多く含む軟質でしまりなし)
11. 黒褐色土 (軟質で強い)
12. 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロックを含む)
13. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む)
14. 暗茶褐色土 (ローム土を含む)
15. 暗茶褐色土 (ローム土を多量に含む軟質)
16. 暗茶褐色土 (ローム土を多量に含む軟質)



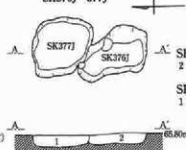
SK371J



SK371J

1. 暗茶褐色土
2. 暗茶褐色土 (ローム土と暗茶褐色土の混合)
3. 暗茶褐色土 (スコリアを含み粘質で硬質)
4. 暗茶褐色土 (スコリア・ローム粒を含む)
5. 暗茶褐色土 (軟質で強い)
6. 暗茶褐色土 (スコリア・ローム粒を含む硬質)
7. 暗茶褐色土 (ローム土と暗茶褐色土の混合)
8. 暗茶褐色土

SK376J・377J



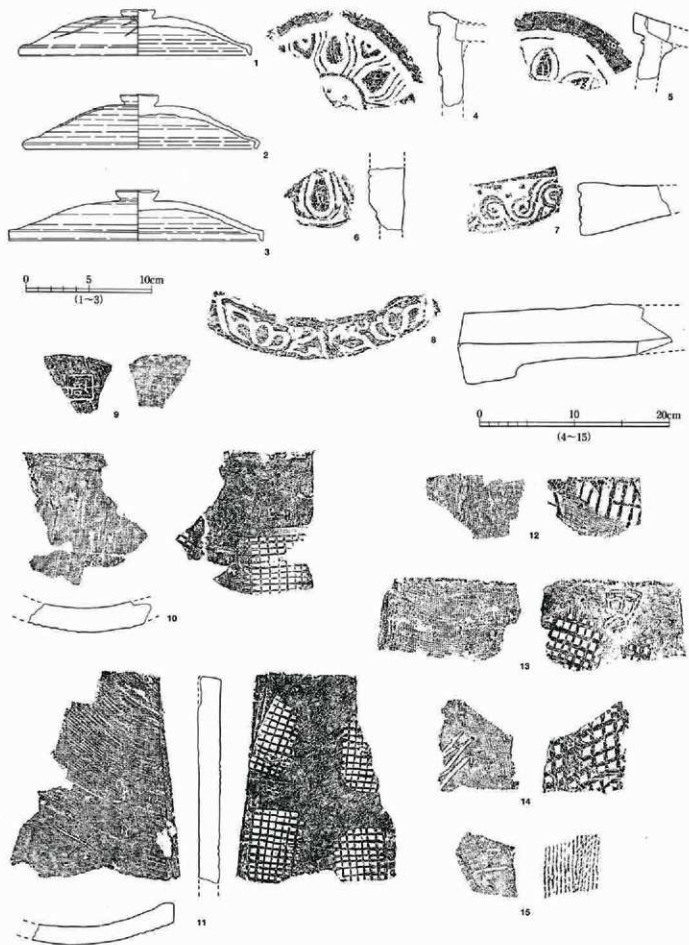
SK376J

2. 暗茶褐色土 (黒色土を多く含む)

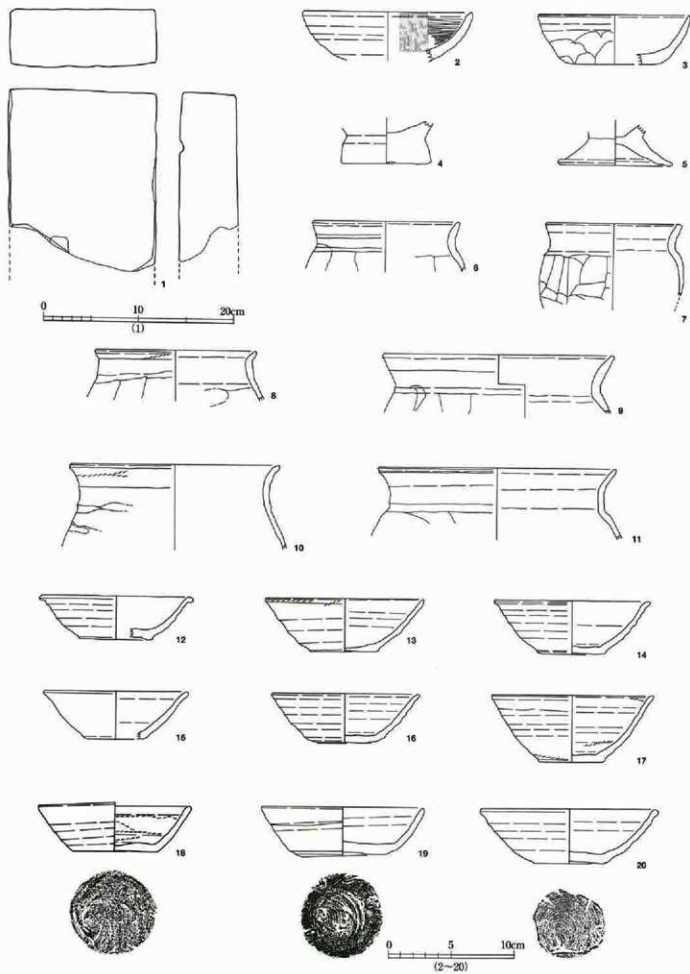
SK377J

1. 暗茶褐色土

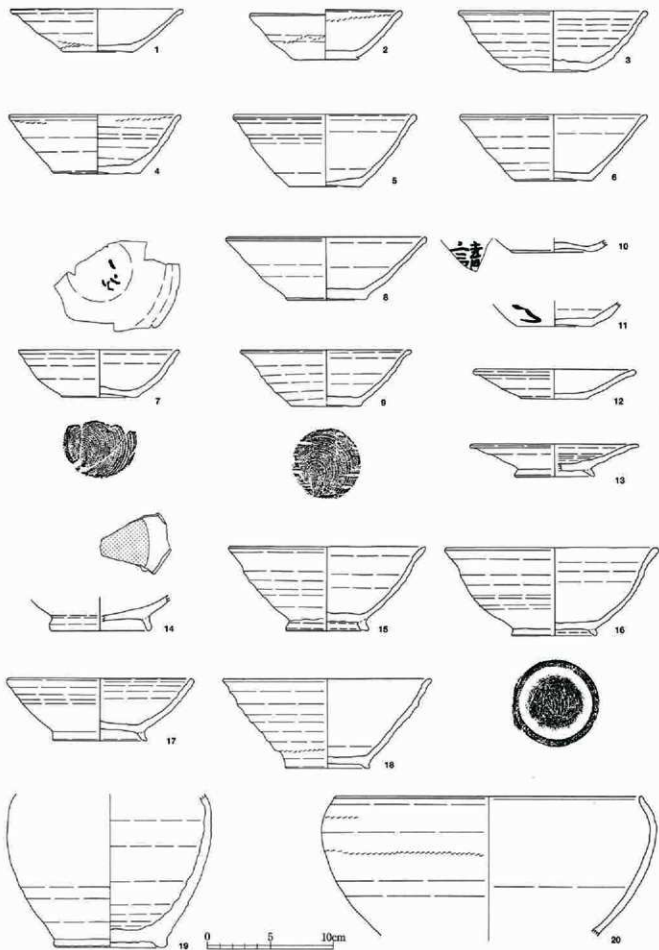
図面10 SD70清跡 出土遺物 (1)



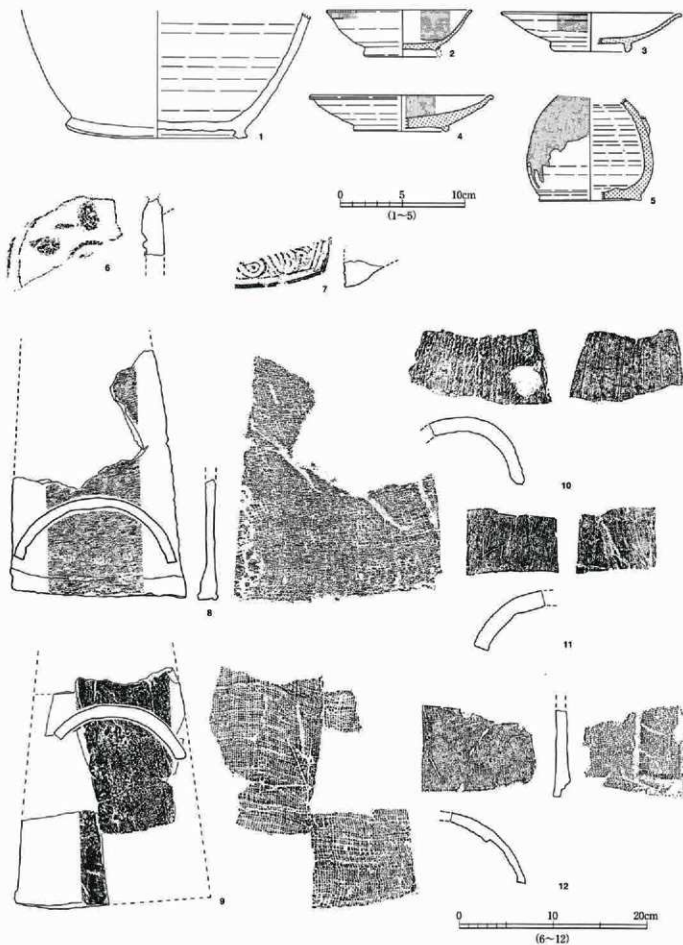
图面11 SD70溝跡 出土遺物 (2)



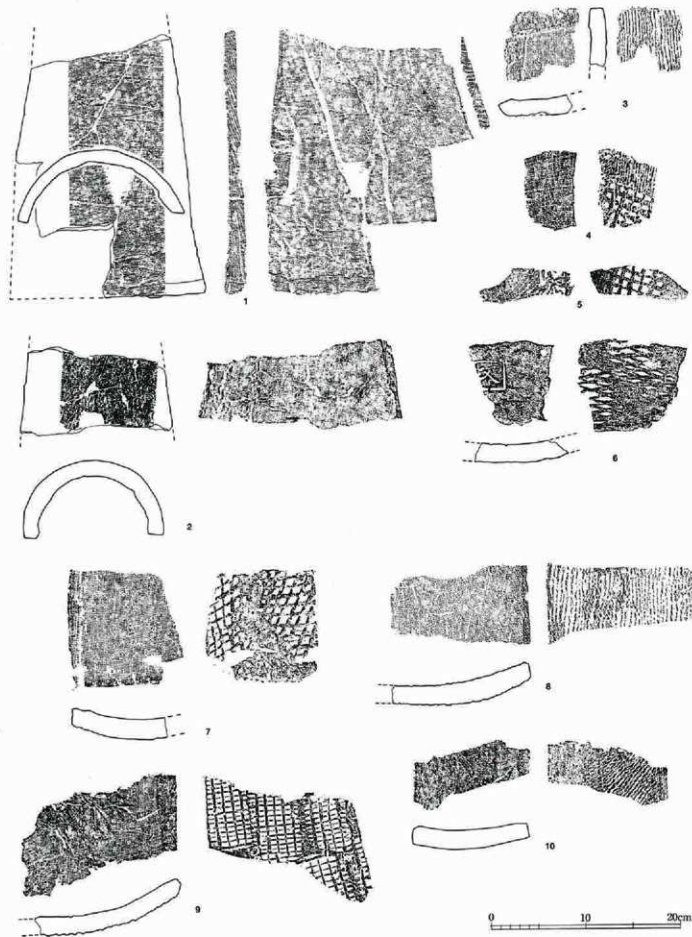
図面12 SD70清跡 出土遺物 (3)



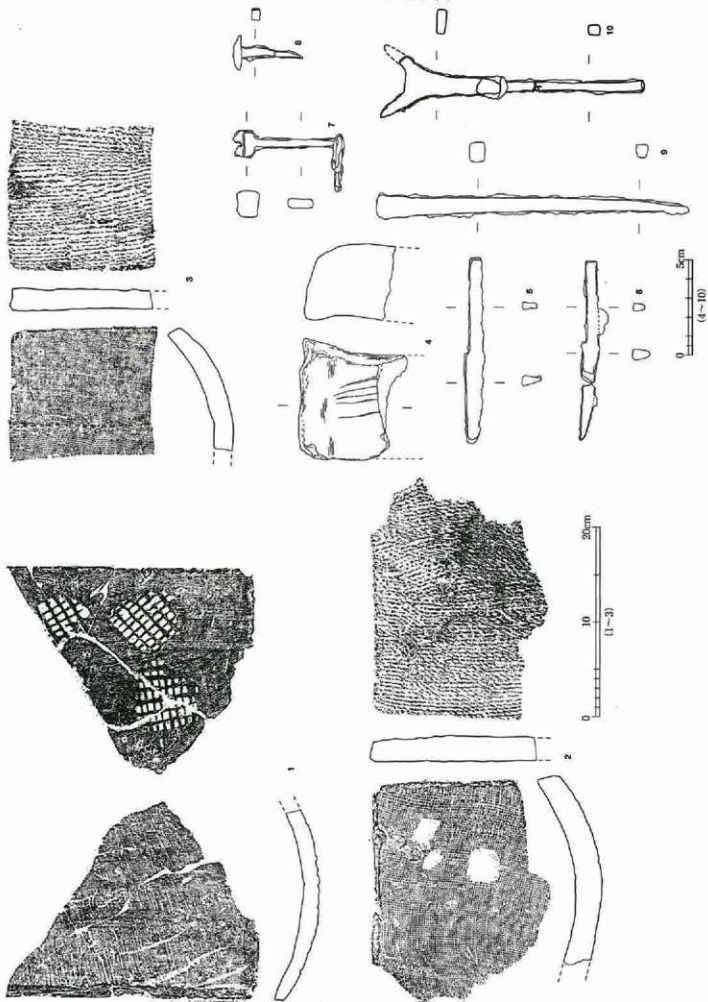
図面13 SD70溝跡 出土遺物 (4)



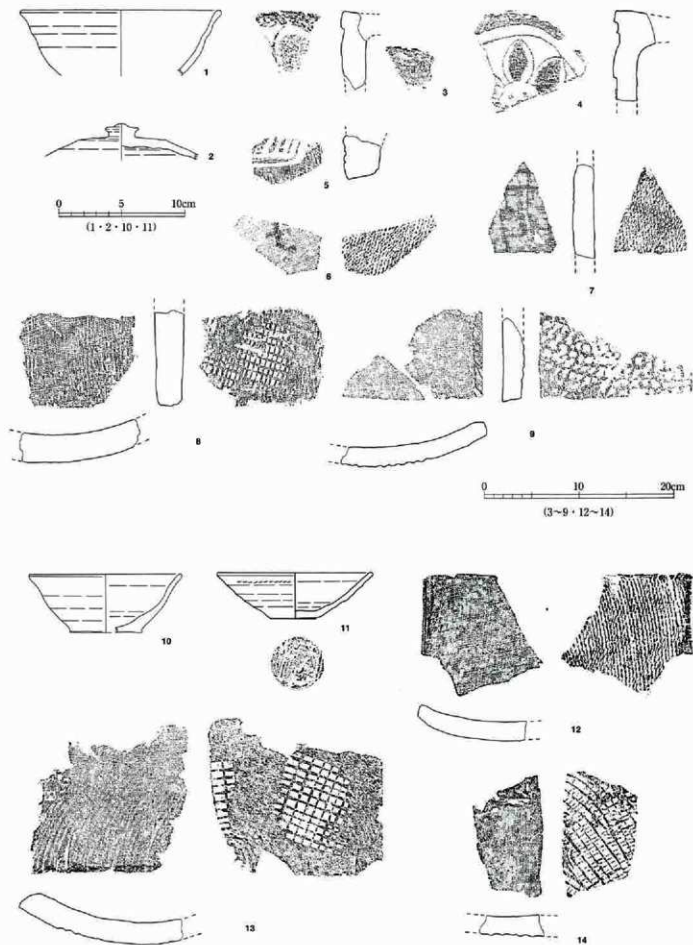
図面14 SD70溝跡 出土遺物 (5)



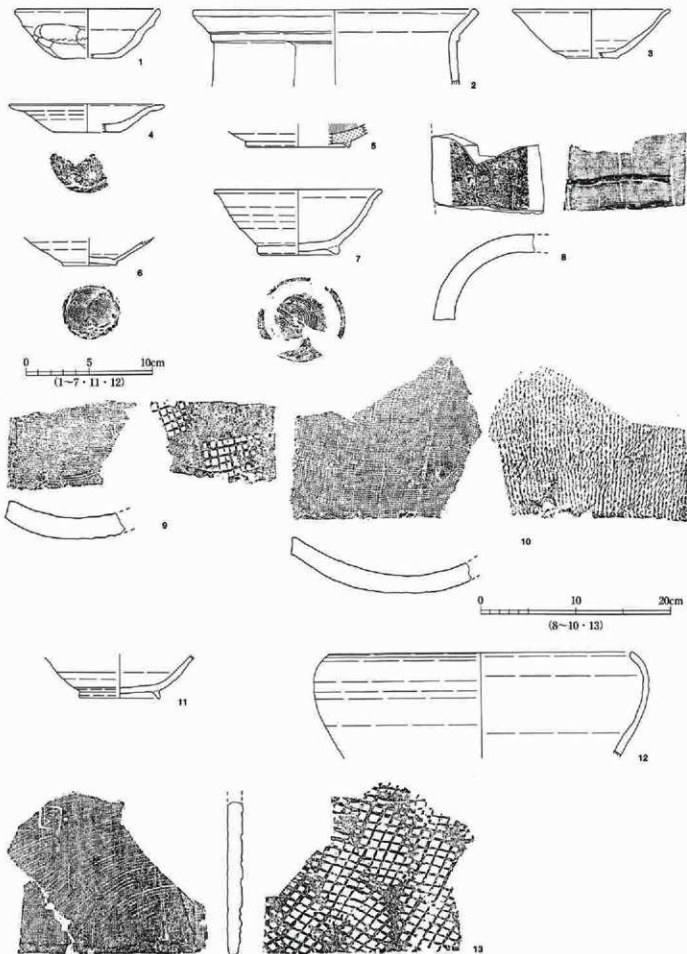
图面15 SD70清跡 出土遺物 (6)



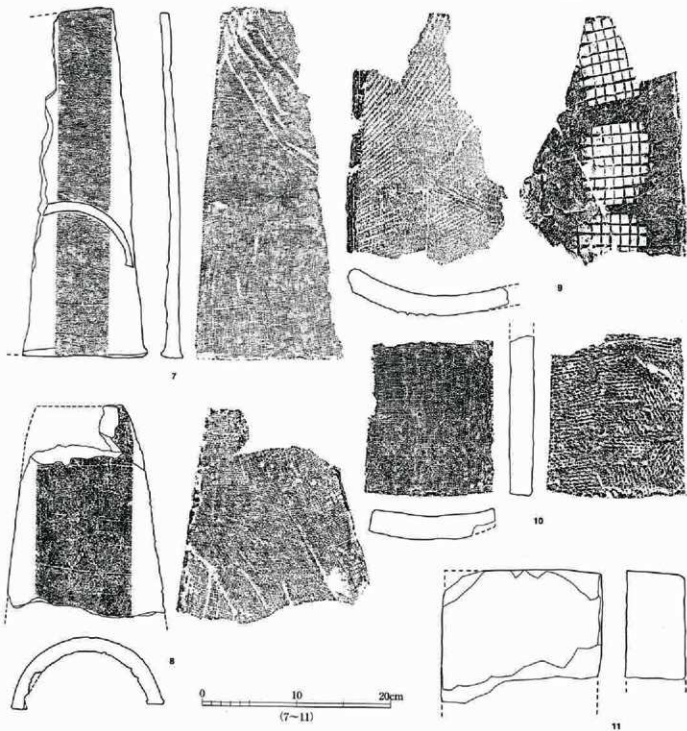
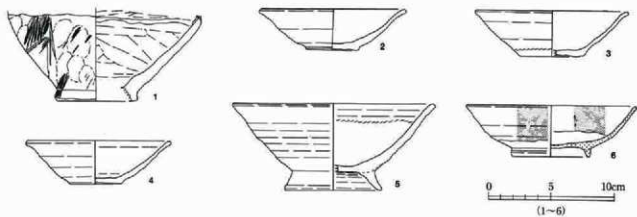
図面16 SD71清跡、SI172住居跡 出土遺物



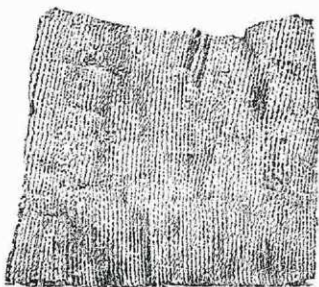
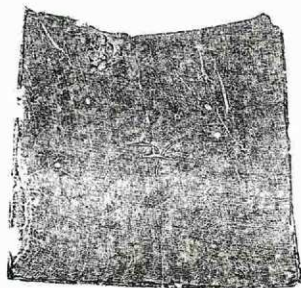
図面17 SI174・186住居跡 出土遺物



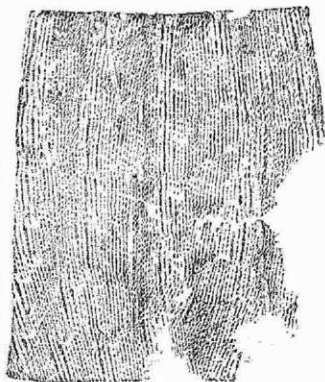
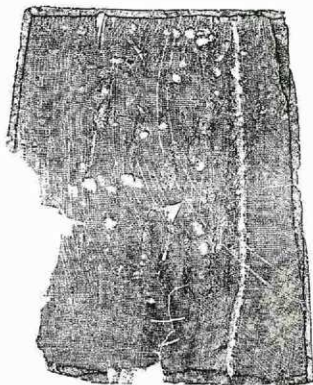
図面18 SH192住居跡 出土遺物 (1)



図面19 SI192住居跡 出土遺物 (2)



1



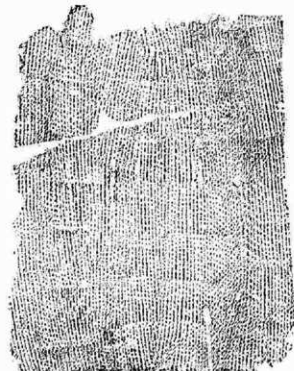
2

0 10 20cm

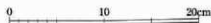
図面20 SI192住居跡 出土遺物 (3)



1



2



図面21 SI194住居跡、SK368・393土坑、遺構外 出土遺物

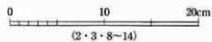
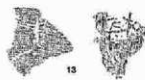
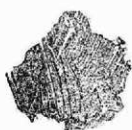
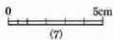
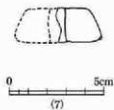
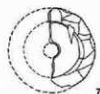
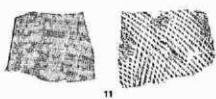
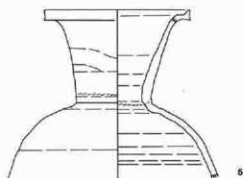
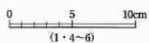
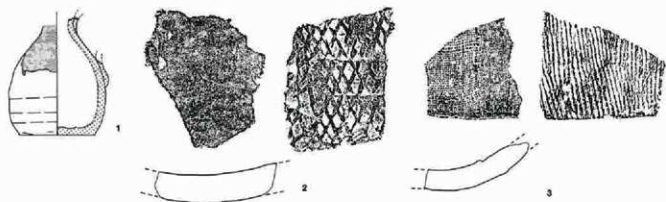


圖 版



1. 遠景 (北東から)



2. A地区南半部西側全景 (北から)



1. A地区南半部東側全景 (北から)



2. B地区北半部東側全景 (南から)

図版3 調査地区 (3)



1. B地区北半部西側全景 (東から)



2. C地区北半部東側全景 (北から)



1. A期溝跡全景 (北から)



2. B期溝跡全景 (北から)



1. C期溝跡全景 (北から)



2. B-B'土層断面 (南から)



3. C-C'土層断面 (南から)



1. 全景 (南から)



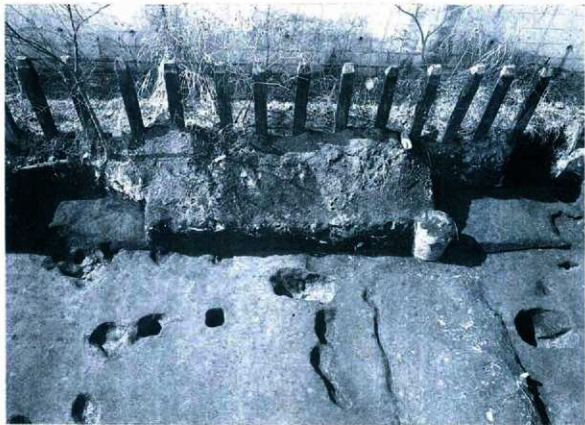
2. SD71溝跡完掘状態全景 (南から)



1. SD74・75溝跡全景（南東から）



2. SD85溝跡全景（南東から）



1. 全景 (東から)



2. 柱穴1-3土層断面B-B' (東から)



1. 全景 (東から)



2. A-A'土層断面 (北から)



3. カマド全景 (南西から)



1. 全景 (西から)



2. 構築時全景 (西から)



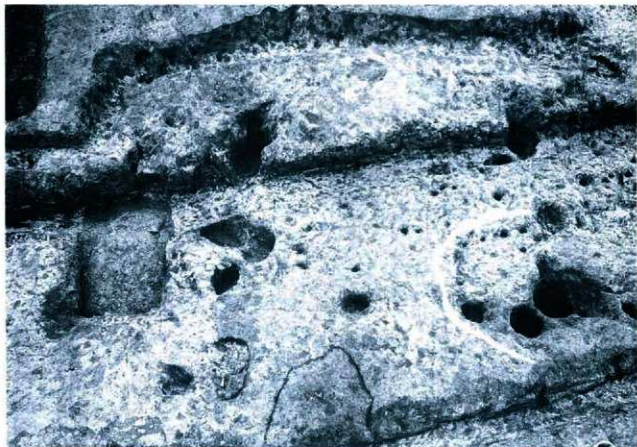
1. 遺物出土状態 (南から)



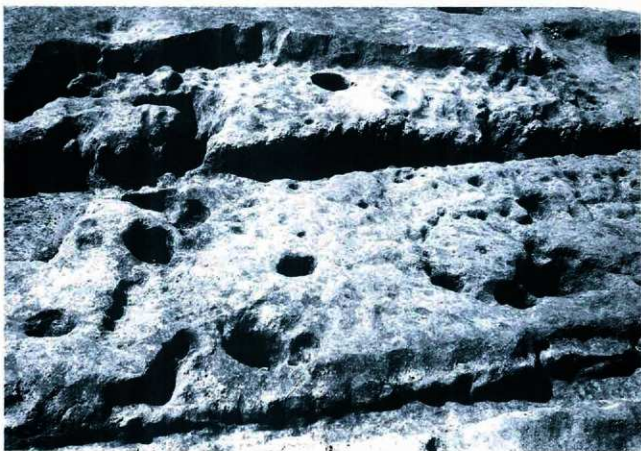
2. カマド遺物出土状態 (西から)



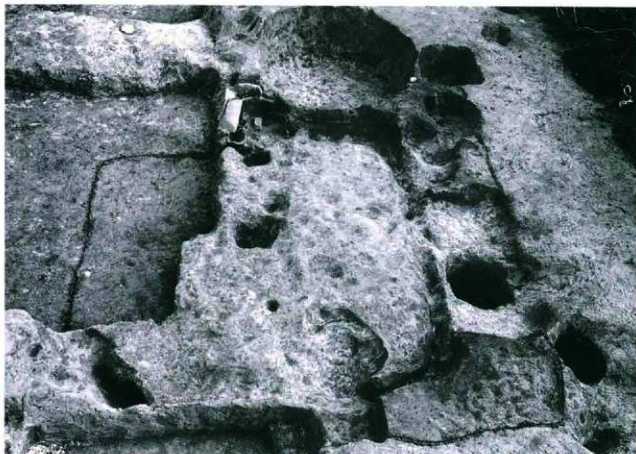
3. カマド全景 (西から)



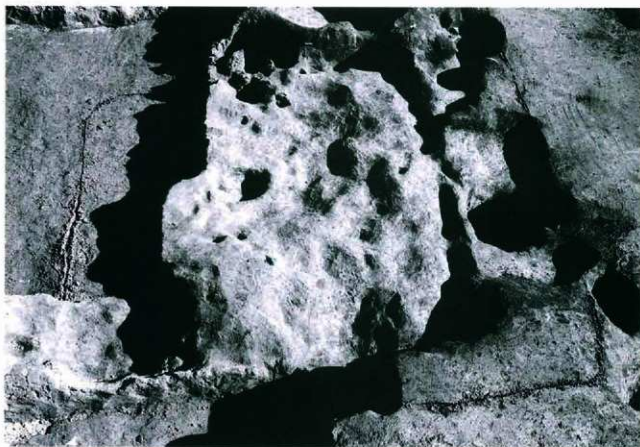
1. 全景 (東から)



2. 構築時全景 (東から)



1. 全景 (西から)



2. 構築時全景 (西から)



1. 遺物出土状態 (西から)



2. カマド全景 (西から)



3. カマド復元状態 (西から)



1. 全景 (南から)



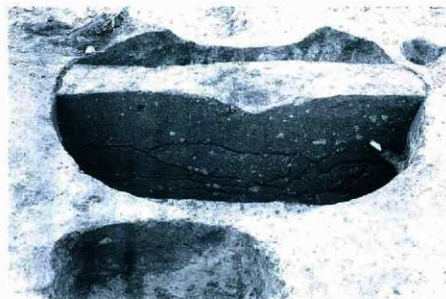
2. 遺物出土状態 (西から)



1. SK311土坑全景 (北から)



2. SK368土坑全景 (東から)



3. SK368土坑A-A'土層断面 (南から)



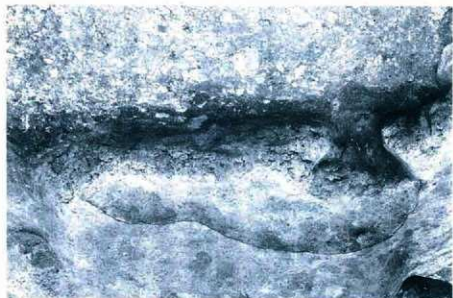
1. SK372~375土坑全景 (北から)



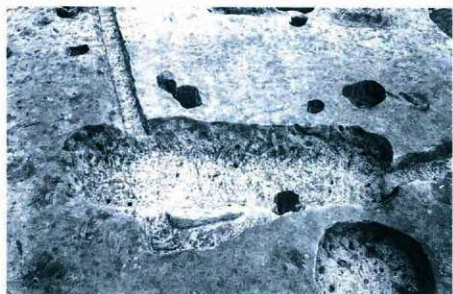
2. SK372~375土坑全景 (東から)



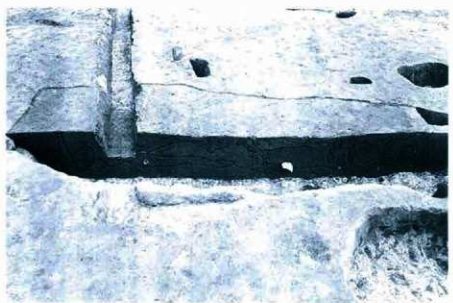
3. SK392土坑全景 (東から)



1. SK393土坑全景 (南から)



2. SK394土坑全景 (西から)



3. SK394土坑B-B'土層断面 (西から)

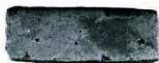
図版19 SD70溝跡 出土遺物 (1)



10-7



10-11



11-1



11-7



12-2



11-18



12-12



11-20



12-13



12-3



11-12



11-13



12-4



11-19



12-8



12-16



12-18



12-15



12-19



13-4



13-6



13-7



13-8



14-9



14-10





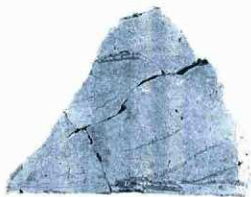
15-1



15-2



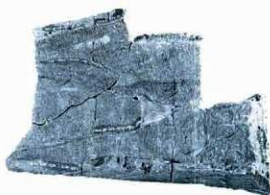
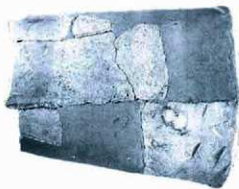
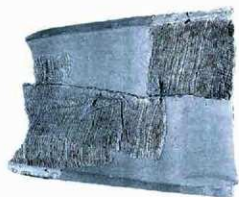
15-3



13-9



14-1





15-4



15-7



15-9



15-10



16-4



15-8



16-11



15-5



16-10



15-6



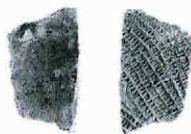
16-13



17-13



17-7



16-14



18-1



18-2



18-3



18-5



18-6



18-8



18-7



18-9



18-10



19-1



19-2



20-1



20-2



21-4



21-5



21-6



21-7



21-1



21-8



21-3



21-9



21-11



10-9



20-1



21-14



10-13



10-15



13-11



14-5



14-8



21-12



10-11



19-1



19-2

武蔵国分寺跡発掘調査概報 27

— 僧尼寺中間地点・(株)日東建設所有地に伴う調査 —

発行日 平成15年3月31日
編著者 国分寺市遺跡調査団
© (団長 吉田 格)
発行所 国分寺市遺跡調査会
〒185-8501 国分寺市戸倉1-6-1
TEL 042-325-0111 (代表)
東京都国分寺市教育委員会内
印刷所 統計印刷工業株式会社

令和4年(2022)2月2日 デジタル版作成